

---

# 新・恋姫†無双～黒狼伝～

黒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新・恋姫<sup>†</sup>無双<sup>〜</sup>黒狼伝<sup>〜</sup>

### 【Nコード】

N3814S

### 【作者名】

黒

### 【あらすじ】

外史は開かれた…

後は役者が揃うのを待つだけ。さあ…新たな三国志を始めよう

この作品は作者の妄想と思いつきでお送りしますm( ) ( ) m

## プロローグ

「はあ…はあ…」

いたぞ！追え！

「はあ…くそっ、しつこい…！」

全身が血まみれで、ボロボロのもはや服とは言えない布を纏っている少年を、数人の男が追いかけている

少年の方は限界が近いのか、半ば足を引きずるように走っている

そして少し視界が開けた場所にたどり着いたのだが…

「……………！！はっ…っついてねえ」

開けた先には何も無い…つまりは崖になっていた

後ろからは少年を追う男達。前は下に滝が見える断崖絶壁

進む事も引く事もできず、その場に立ち尽くしていると…

「やっと追いついたぞ！このクソガキが！」

怒りで顔を真っ赤にしている男達が追いついて来た

「よくも俺達の仲間をやってくれたな！」

「生きて帰れると思うなよ…」

どうやらこの少年は男達の仲間を倒したらしく、口々に男達は少年を罵る

「はっ…よく言っぜ。先に俺達の村に手を出したのはお前らだろうが」

少年から殺気が溢れ出る

しかし男達…賊は怯みながらも

「そ、そんなもん知ったことか！」

「この御時世、弱者は蹂躪される運命なんだよ！」

「へえ…なら、アンタらも弱者だったんじゃないか。こんなガキ一人に部隊は壊滅。たまたまアンタらが根城にしていた洞窟が崩れなかつたら全滅だったんだからな」

少年は冷たく言い放つ。賊からは返事は無い

…何故なら、事実だからだ

「だ、だけど！今は現にお前を追い詰めてるんだよ！」

「そ、そうだ！お前自分の置かれてる状況わかってんのか！？」

少年がケガを負っている事に、勢いを取り戻す

しかし少年はそれを予想していたかのように薄く笑みを浮かべて

「そんなもん百も承知だ。だからな…」

俺はアンタらに捕まるくらいなら、自決を選ぶ」

『！？』

少年は自ら、崖の向こうに身を投げる

そこに残ったのは、状況についていけずに呆けている賊と、少年が滝壺に落ちた事を示す水の音だった

## 出会いと始まり

「ぐっ！…ハア…よく生きてたな俺…」

滝壺目掛けて落ちたものの、下手したら死んでたな

しかし…やっぱり体のあちこちが痛エ…

何とか体を引きずって川辺の森の所まで来たが、遂に体力が尽きて木にもたれかかるように座り込んでしまう

ヤバい…意識が…

??? side

「…ふう」

大分歩いたな…次の街はまだだろうか？

そんな事を考えながら歩いていると、風に乗って鉄臭い匂いが流れ  
てきた

…賊か？もしそうなら…

自然と武器を握る手に力が入る

はやる気持ちは抑えつつ、早足で匂いを辿って行くと…

木を背もたれに、周りが血溜まりになるほどの重傷を負った、私と  
同じ年くらいの男がいた

私はあまりの惨状に暫く立ち尽くしていたが、

「おい！？大丈夫か！？しっかりしろ！」

と、すぐに応急手当を施す…と言っても、傷口を布で縛って出血  
を止めるだけだが

その後は男の服が濡れていたので、すぐに火を起こす

…手当をした以上は目が覚めるまでいるのが義理だな

そう思った私は疲れからかそのまま目を閉じた…

????side end

ぞ！

は、！

「……………ん……………!？」

ほんの僅かだが、殺気を感じて跳ね起きる

……というかいつの間に火を……ってこの女の子か……



そう思った俺は女の子を起こさないようにそっと立ち上がる

…恩返しって訳じゃないが、この子を護るとしますか

薄ら笑いを浮かべて出てくる賊を見て、そう決めた

「おい、見るよ！やりやすそうな力モがいるぜ！」

…まだ遠い。この子を起こさないように、かつ近づけさせないように…

「おっ！そこで寝てる女も上玉じゃねえか！今日はついてるな」

…後少し…

「おい兄ちゃん。金目のモンとそこの女を置いて…」

………今！

俺の領域に入った賊は、一人残らずその生涯を終えた

?????side

「んう…?」

いつの間にか寝てしまっていたようだ…

そのままじつじつとまどろんでいると

ザクッ！ブシュッ！

近くから何かを斬る音と、血の匂いがした

その事に飛び起きて慌てて武器を取り、気配を確認する

…あれ？あの人がいない…？まさか！？

最悪の状況を考えてしまい、焦りと不安からか、慌てて茂みを飛び出してしまった

…そこには、見る限りゆうに100は越える数の賊と、手に持った大小二つの片刃の剣を持ったあの人がいた

???side end

ザクッ！

斬る

ただ斬る

ドスッ！！

ひたすら斬る

ザシュッ！

斬る斬る斬る斬る

そんな事を繰り返してようやく始めの半分程になった時に、賊の動きが止まる

「…どうした？俺を殺すんじゃないかったのか？」

「…なんでだ？」

賊の頭らしき男が話に乗ってくる

「何がだ？」

「どうしてお前は…他人の為にそこまでできる？何故、そこまでしてあの女を護ろうとする？」

「…あの子はな、死にかけだった俺を助けてくれた。信じられるか？この御時世に見ず知らずの男を助けたんだ」

「……………」

「命を助けて貰ったんだ。それに比べりゃ、可愛い娘を賊から護るくらい当たり前だろ？」

「…クハハ、お前もかなりお人好しじゃねえか」

「…かもな。けど、この事で裏切られても、死んだとしても、俺は後悔はしない。俺の人生は俺が決める」

「…フツ、面白いガキだな。」

…今回はその決意に免じて引いてやるよ。オイ野郎共！撤収だ！」

どうやらただ単に何でもかんでも殺そうとするそこらの賊とは違ってみたいだな

そう考えていると、頭が不意にこちらに振り向き

「俺の名は張燕だ。せいぜい長生きしろよ？マセガキ」

「余計なお世話だよクソ野郎。…俺は姜維だ」

そのまま張燕は高笑いして去って行った

そして賊の気配が完全に無くなったのを確認した後、女の子の所に戻ろうとすると…

俺の後ろに何故か顔を赤らめているさっきの女の子が立っていた

「悪い、起こしちまったか？」

「い、いや！大丈夫だ！…って大丈夫なのか！？かなりの重傷だっただろう！」

「いや、無理」

「そうか…ってええ！？」

あ、なんか楽しい

「冗談だ。ちょっと血が足りなくらいだから」

「それ結構問題なんじゃ…」

まあ、冗談は置いて…

「見た感じ、アンタも武人みたいだな」

「ああ。姓は関、名は羽、字は雲長と言つ」

「俺は姜維。字は伯約。…さて、まどろっこしいのは嫌いだから単刀直入に聞くぞ？」

俺は少し真面目な表情になって関羽に尋ねる

「ああ。どうした？」

「関羽…」

「ここ、どこだ？」

「はい？」

その時の関羽のポカーンとした顔は、可愛らしかったとだけ言っておこう

おいでやす黒狼衆 (前書き)

携帯の変換機能にないので“じょうよう”を“穰陽”とさせて貰います

(本当は穰ののぎへんがない)





でもな…

「愛紗、心配はいらねえよ。一応無害だから」

そろそろ来るな〜とは思ってたがなあ

今回は無駄に速いな

「い〜〜〜〜〜!」

「…物凄い速さで突っ込んできてるけど?」

「俺に来てるだけだから大丈夫」お兄い〜〜〜〜〜!」…落ち着け」

速度を落とさずに突っ込んできた奴をそのままの勢いで、上に投げ

そして奴は持ち前の身体能力で綺麗に着地する

「…よく普通に着地できたな」

「いや〜それ程でも〜／／／」

照れてる所悪いが間違いなく皮肉だぞ?それ

「まあ、それはともかく…お兄い!ただの散歩にどれだけかかるの  
さー!」

「…一年ちよいくらい?」

「二年だよ!!」

「そんなキレんなよ」華音

「佳史…お前二年もさまよってたのか…」

愛紗が呆れる

…そして愛紗が俺の真名を呼んだ瞬間、華音の雰囲気が変わった

「…何故お兄いの真名を？場合によっては…許さないよ…？」

殺気を思いっきり愛紗にぶつけているが、愛紗はケロッとしている

…やっぱりコイツは…

「止めとけ華音。俺が許してる。…それに多分お前じゃかなわねえぞ？」

「…なんとなくわかってたよ…でも…」

「わかってる。ありがとな華音」

「えへへ…／／／」

華音の頭を撫でると嬉しそうに笑う

「…後、愛紗に言う事があるだろ？」

「うん…あの…」

「何だ？」

ん〜…愛紗はちょっと威圧的などこあるからな〜…

本人無自覚だけど

…霞辺りが大変だな。絶対戦おうとしそうだ

「その…ごめんなさい」

「いや、こっちも配慮が足らなかった。済まないな。私は関羽、字を雲長と言っ」

「あ、私は太史慈、字は子義、真名は華音かのんです！」

「真名を…いいのか？」

「はい お兄いが認めた人に悪い人がいませんから」

「そうか。なら私の真名は愛紗だ」

うむ、二人共仲良くなったようで何よりだ

「あ、お兄い？霞と優里が本気で怒ってたよ？」

「……………」

「霞は『八つ裂きにしたる！』って言うって息巻いてたし、優里は『いっそ、両足切断くらいしといた方がいいかな？』とか言ってたよ

「？」

事実上の死刑宣告ですぜ華音サン…

という訳で…

「華音！俺もうちょっと人材探索してく「させるわけないでしょ？私まだ死にたくないもん」

逃げようとした所を華音に捕まる

くっ！作戦一、逃亡は失敗か…なら！

「お前は俺に死ねって言うのか！？お前をそんな風に育てた覚えはないぞ！」

「多分死にはしらないと思うよ？後お兄いに育てられた覚えもないし」

「まあ、俺は拾っただけだったしな…」

「わかったら早く行こうね」

と、華音は俺を引きずって歩きだす

…コイツの華奢な体のどこにそんな力があるのかが知りたい

…じゃねえ！

「ちよ！待て待て待て！せめて心の準備をさせるオオ！」

「お兄いしつこい。諦めて大人しく絞り取られなさい」

「ちょ、絞り取られるって何だ！？お兄いは貞操の危機を感じます  
！」

「実際危ないしね。」

…あ、愛紗さんの事はさっき伝えといたから、一緒に来てね」

「ん？ああ。わかった」

「無視！？酷くね！？しかもさらっと恐ろしい事言いやがりました  
よね華音サン！」

「…さあ！行くよ」

「だから待ってくれエエエ！！」

再び歩き出した華音に為す術なく引きずられる俺なのであった（泣）

（穰陽・政庁）

「　　と言つ訳で、あなた達にこの穰陽を治めて欲しいのです」

「だから今責任者がいませんから判断できませんってもう二・三カ  
月くらい言ってますよね？」

「全く、いつ責任者の方は帰ってくるんですか！？」

「そんなもんウチらが知りたいわ！」

暫く華音に引きずられ、必死に言い訳を考えていると、よく知った声が聞こえてきた

…ちなみにここに来るまでの街のみんなの視線は生温かった。軽く死にたくなつた

いや、まあ死ぬつもりないけど

「お〜！優里！霞！久しぶりだな！」

「ん？何や佳史かいな…」

「今は話してる暇がありませんから話なら後で…」

「「佳史（様）！？」」

「はい、佳史さんですよ」

二人は俺の姿を確認すると、全力で走り出し、そして…

「このアホオ！」

「佳史様の方向音痴！」

「げばっ！？」

霞は肩を、優里は腹を思いつきり殴ってきた

「痛っ！マジでいった！テメエ等急に何しやがんだ！」

「うるっさいわアホ！どんだけ長い散歩やねん！どんだけ方向音痴やねん！その間のウチらの苦労わかんのか！」

「いや知らん！」

「威張るとんちやうわあああ！！！」

霞が全力で叫ぶ

いや〜からかいがあるわ。流石霞

「はあ…まあ、私は今のでチャラにしてあげます。それより仕事ですよ」

「え〜…」

「……………」

やれ」

「さっつて、早速仕事に取りかかりますかな」

…キレた優里のあの目には逆らえません

普段怒らない人がキレると本気で怖いね！

「冗談はともかく、さっきからこの街の責任者が来ております。ど

うもこの街の太守になって欲しいようで……」

「どうかお願いします!」

「ん〜…だが断る」

「何故です!あなた達程の方なら……」

「俺は自由でありたいんだよ…それこそ、孤高の狼みたいにな……」

「……………」

街の長老らしき人は、俺の話を聞くと、説得は無理と判断したのか一礼して帰っていった

「佳史…お前義勇軍の長だったのか」

若干空気になっていた愛紗が尋ねる

「あれ?言ってなかったか?」

「全く」

「…まあいいや。優里!霞!帰ろつぜ」

そう言って義勇軍の隊舎に愛紗を連れて向かう

華音?とつくに帰ったが?



「…おい霞」

「…なんや？」

「なんだこれ」

「垂れ幕」

今の状況を説明すると、俺の横に啞然としている愛紗、こめかみを抑える優里、普通の霞がいる

いや、無理ねえよ？だって隊舎に

“お帰りなさい姜維様”

“いらっしゃーい関羽殿”

“おいでませ黒狼衆”

と書いてある無駄にデカイ垂れ幕がかかっている

「霞」

「なんや？」

「お前兵に何吹き込んだ？」

「佳史の中で悪乗り〓ウチになってないか？」

「違つのか？」

「ちやうわ！」

とりあえず隊舎の中に入り、無駄に興奮している兵を落ち着かせて垂れ幕を降ろさせる

そして愛紗を含めた黒狼衆の主要人物を全員俺の部屋に集める

「で？佳史？何の用や？」

「いや、お前ら愛紗とロクに会話してなかったから一応自己紹介だけでも、つてな」

「ああ、そういう事やったか。関羽やつけ？ウチは姓が張、名は遼、字は文遠や！よろしゅうな！」

「全く、突然なんですから…私は徐庶、字を元直と申します。お見知り置きを」

「佳史…お前本当に自由人だな…私は関羽、字を雲長と言う。よろしく」

霞以外から割とキツイ言葉を貰ったが、とりあえず自己紹介が済むさてと…

「まあ、後はとりあえず俺の個人的な用事になるんだが…」

「え？個人的って…まさか佳史！ちょ、まだウチ心の準備が…でも

どうしてもって言うんなら…／／／」

「……………／／／」

「…お兄い…」

「お〜い、戻ってこ〜い。安心しろ。お前が思ってるような展開は絶対ねえから。後優里は想像しただけで固まん。華音は誤解すんな」

全く…愛紗が完全に置いてけぼりじゃねえか。ポケんなら全員巻き込んでボケろよ

「用事ってのはな…愛紗！」

「……………／／／ふえ？私か！？いや、その…あの…私達は会って間もないと言うか…なんて言うか…その…優しく、頼む／／／」  
「いや、もうそのネタいいから」

まさか愛紗まで乗ってくるとは…恐るべし霞の漫才能力！

「はあ…本題入るぞ」

『は〜い』

「ああ／／／」

…そんなに恥ずかしかつたならやらなきゃ良いのに

「愛紗…ウチの義勇軍に入ってくれねえか？」

「え？」

ポカーンとする愛紗。まあ急だったしな

「今すぐ決めるとは言わねー。とりあえず数日過ごして決めてくれ」

「…いや、もう決めた。私は「伝令！！」

愛紗が何か言いかけた時に伝令が走って部屋に入って来た

「どうした？」

「天水の董卓殿から依頼です！賊の討伐で、予想外に賊の数が多かつたらしく、手伝って欲しいと」

「月つちか？ならええんちゃう？劉虞とか孔抽とかと違って本当に困ってるやろうし」

「そついや霞は董卓殿と面識あつたな…これも何かの縁か賊の大まかな数と董卓殿の兵数は？」

「賊軍約三万、董卓軍約一万。ですが実際に董卓軍が出れるのは七千らしいです」

「ならこっちは騎馬四千で十分か」

「騎馬！？」

愛紗が驚く。まあ義勇軍が騎馬持つてるなんて珍しいしな

俺達は拠点を穰陽にしているから、当然賊や野盗から護っている  
だからか、やたら民に好かれていて、太守でも無いのに、毎年麦や  
米をくれる

一度太守じゃないから別に無理して出さなくていいって言ったら  
私達が好きで納めてるんですよ」と言われるくらいだ

…まあありがたい事には変わりないけども

そんな訳で俺達は義勇軍の割に結構そこらの軍と変わらなかつたり  
する

…つと、話が逸れたな

「遠征は俺と霞と…ちようどいいや。愛紗、来てくれないか？」

「よっしゃ！任せときー！」

「うむ。喜んで手伝わせて貰おう」

「よし！じゃあ明後日出発な！優里！兵糧と金子の準備頼むぜ！」

「承りました」

さて、久しぶりに義勇軍の仕事しますかね

最強の義勇軍〜所以（ゆえん）〜

穰陽を出発してから数日が経った

「なあ、佳史〜まだつかへんのか？」

「はいはい、もう今日中には着くから我慢な〜」

穰陽を出た時から霞がこんな状態です

最近黒狼衆の名前が広まり過ぎたのか、攻めてくる所か近づいてくる賊すらいなかったからなあ

とりあえず暴れたいんだろ。戦バカだから

「それにしても董卓殿は大丈夫なのか？天水から穰陽までですら距離があるから賊が発見されたのはもつと前ではないのか？」

愛紗がもつともな事を言う

うん、普通ならな

「愛紗、詠…價クの情報網ナメんなよ？多分1ヶ月先位ならほぼ正確に予測してるぞ？」

「そんな…流石にそんな芸等、できる訳が…」

「マジだ。現に今出回ってる黄色の鉢巻巻いた賊…黄巾党だったか？それが出てくんのも予測してたしな」

「…本当か？」

「ホンマや。ついでに言うたら曹操が何進から独立すんのも読んどったで？」

「…本当に何者なんだ？その價ヶ殿と言つ者は…」

気持ちはよくわかるぞ

そしてその会話の後、四半刻もせずに長安にたどり着いた

「やっと来たわね」

俺達を迎えたのは緑色の髪とツリ目を備えたツンデレ軍師だった

「おす。久しぶりだな」

「堅苦しい挨拶は後よ。今は時間がないの。もうすぐそこまで賊が来てる」

「なら軍議だな…場所は？」

「その天幕で。別にここでもいいんだけど…華雄がね…」

ん？聞いた事ない名前だな…新参か？

「わかった。霞、兵を頼む。愛紗は着いて来てくれ」

「了解や」

「わかった」

「？そつちの黒髪の方は新参？初めて見るけど」

詠が愛紗に興味を示す

「これは失礼した。私は関羽、字を雲長と言う」

「私は價ク。字は文和よ」

「そつか…貴殿が…」

「??？」

「いや、なんでもない」

…ちよつと愛紗に詠を誇大化させすぎたか？

俺はそう思ったが反省はしない

「…まあいいわ。すぐ軍議だから一緒に来て」

「へい」

俺と愛紗はそのまま大人しく詠に着いて行った



〈天幕〉

「だから！私が出れば賊如きすぐに蹴散らしてやると言っている！」

「バカですかあなたは！いくらあなたがそれなりの将だと言っても敵軍は三万です！」

「へう〜…皆さん落ち着いて下さい〜」

「…華雄、勝てない」

「恋殿の言つとおりなのです！いくら恋殿が一騎当千だとはいえ、ここは策をもつて…」

「…詠、これなに？」

「軍議…のはずよ」

詠が頭を抑えて唸る

…今度いい頭痛薬を持って来てやろう

「これがか…」

「愛紗？こついうのは心の中で抑えるのが大人だぞ？」

「私はすでに成人している！」

そりゃ見た目確実に15は越えてるしな

「まあいいや。それは置いておくとして…なんで月とかな陷害までいるんだ？」

愛紗が「よくない！」と言ったような気はするが放っておく

「それは…」

「佳史、キリがない。まずは天幕に入って直接聞いた方がいいと思うぞ？」

「それもそうだな」

俺は普通に天幕をくぐる

後に続いて詠、愛紗も入ってくる

「どうも〜、まいどおーきに黒」誰だ貴様は！？賊の刺客か！！」  
おっと

俺が声を発した瞬間、銀髪の女が斧で斬りかかってくる

それを紙一重で避けるが、再び斬りつけてくる

「じゃあねえな…」

武器は抜かない。だが、取り押さえはさせてもらおう！

高速で迫る斧に手を置いて軌道を逸らし、直ぐに間を詰め、女の腕

を抑えて武器を落とさせ、そのまま地面にねじ伏せる

その動作…全て一瞬

「くっ！殺せ！」

「はいはい、慌てないの。…月、陷奈、恋。久しぶりだな「ちんきゅきゅきゅくく！」って危ない?」

突然幼女が俺の首を正確に狙って蹴りつけてきた

勿論普通に足掴んで事なきを得たが…

「恋殿の真名を軽々しく呼ぶなのは！そしてねねを解放するのは！」

「恋。これなに?」

「…ちんきゅ。恋が拾った」

「無視するなのです〜！」

うるっさいな。回すか

「そうか。とこ「や、やめ！」ろでなん「回すなのです〜！」で月が戦に「うう、よ、酔って」出てきてんだ?「ああ、なんとも綺麗な花畑が…」(ポイント)…お前戦えねえだろ?」

ちんきゅ?を生と死の狭間まで招待した所で適当に捨てる

え？生きてんのかって？大丈夫だ。既に陷奈が拾って寝台に寝かせてるから

「ああ、私達、洛陽に転封になったんです。けど途中で凄くたくさんの賊が…」

「なるほど。だから俺達に依頼した、と」

「…はい」

…どうやら本気で困ってるみたいだな

ん…月にはデカイ借りもあるし…

「よし！ならこの戦、俺達が請け負った！」

『へ！？』

「だから、俺達で賊の相手するからお前らはさっさと洛陽に入れって言ったんだよ」

『ええっ！？』

そこまで驚かなくても…

「佳史、お前正気か？賊は三万もいるんだぞ？いくら何でも四千でかなう訳が無い！」

「俺は勝てない戦はしね！。心配しすぎだ」

「むちゃくちゃなのです！たかが義勇軍の練度で数倍の数の敵と戦うなんて自殺行為ですぞ！？」

復活早いなちんきゅ

「陳宮の言うとおりだ！だから私を早く出せと」「お前は戦あないたいたいだけだろ（でしょう）」「……」

陷奈と二人で華雄を黙らせる

っーか

「何でお前達まで驚いてたんだ？ウチの兵の練度知ってんだろっが」

「ノリって大事ですよね」

「その…陷奈さんをお願いされて…」

「月が驚いてたから」

ああ、予想通りの答えだ。特に陷奈

「月はまあいいや。詠はいい加減月離れしろ。陷奈は一回精神を叩き直してこい」

詠の月コンはもう手遅れだが、陷奈のアレは見逃せない

「まあ、その話ともかく…そちらの方は？」

…ごまかしやがった

「…ああ、コイツは…」関羽雲長と言う。「…だ。まあ、今はウチの客将だな。義勇軍の客将つてのもおかしな話だが」

「黒狼衆は特殊だしね…いいんじゃないの？それより…本当に任せていいの…？」

「ああ。月達には黒狼衆立ち上げの時に世話になったしな。それに…洛陽行ってからの方が大変だろ？」

そう言うと詠と陳宮が目を見開く

「佳史…あんたどこまで…」

「何故それを…」

「何進暗殺、猿紹による十常侍暗殺…それで失脚した張讓が絶る先と言えば最も洛陽に近く、勢力の強い月の所しかない。そして月の性格からして困ってる奴は見捨てられない。加えて張讓はかなりの野心家だ…恐らく月を利用できるだけ利用するだろ。けど月には詠がいる。月が張讓に飼い殺しにされるなんざ詠が許すはずがない…だが、月が張讓の申し出を断るはずがない。そうなると月に被害が及ばず、かつ約束は守るとなれば…」

暗殺しかない

事後処理がどれだけキツくなるのが、月…董卓軍と言う勢力を保つにはそれしかない

「…そうよ。だから洛陽に入る前に無駄な兵の消費は避けたかった。

だから黒狼衆に依頼したのよ」

「やっぱりか…」

ちなみに今更だがここには俺、詠、陷奈、陳宮しかいない。残りは月が霞に会いに行くのについていき、愛紗には兵をまとめるのを任せただからだ

「…軽蔑した？いいわよ。別に。ボクは月を守るためなら」別に気にしてねえよ「！？」」

「詠のその考えはただ自分達に被害を出したくないからじゃなく、先の事を考えて、だろ？そんな主思いの軍師様が考えたんだ。まず最良の策で間違いないナシだ。…それに月には感謝してもしきれねーんだ。ちょっとくらいの無茶なら引き受けるさ」

「佳史…」

「佳史さん…」

「今をもって、黒狼衆頭目、姜維伯約の名と黒狼の“誠”の信念にかけて、依頼を遂行する事をここに誓う」

「ええ…任せたわよ」

「よろしく頼むのです」

さて、契約成立だな

「…けど、流石に三万に四千で攻めるのは自殺行為です。私が援護

に入っても構いませんか？」

ちよつと安心していたが、すぐに気を張る

「冗談は止める！オイ詠！コイツだけはダメだ！せめて他」  
「…いいわよ」  
「オイ！？」

「だそうですよ佳史 よろしく頼みますね」

「不幸だ…」

確かに陷奈…高順は“陷陣営”の二つ名を持つくらい優秀な将なん  
だが…

「ふふふ…これでようやく佳史と…今回は逃がしませんよ…」

コイツは事ある毎に俺に迫って来るから苦手なんだよ…

「言つとくけどお前左翼以外入らせねえからな」

「な！？そんな殺生な！佳史はそんなに私といるのが嫌なのですか  
！？」

「ああ。やだ」

「そ、そんな…いやでもそういう趣向だと思えば…ジュルリ」

「本当に医者に看て貰ってこい」

そして見ての通り変態でもある



「…ハア。しゃあねえ。陷奈、騎馬千を率いて左翼だ。頼むな」

「はい」

さて…賊の皆さん…俺の手のひらで踊って貰おうか…！

「ねね…」

「なんですか？」

「この戦、あなたは特にしっかり見ときなさい」

「…どうしてですか？いくら強いとはいえ、所詮は義勇軍。正規軍と比べれば見劣りするのでは？」

「それが普通の義勇軍ならね…けどあいつらは…黒狼衆は時に正規軍をも凌駕するのよ」

「なっ…！？」

「“神速将”張遼、“闇鳥”太史慈を有し、政治には名高い徐庶がいる…それに陷奈だって元々黒狼衆で月の護衛を頼んでるだけだしね」

「…本当に義勇軍なのか激しく疑問なのです。それだけの戦力があるなら街の太守になっても不思議ではないのに…」

「筆頭が雲みたいに掴めないヤツだから…ボクも読み切れてないし。」

… 本人が『皇帝の任命でもない限りは自由でいたい』って言うてるから多分自然にはならないでしょうね」

「しかしそれでは軍としての力が限られるのではないのですか？ ねなら迷わず理想より現実を取りますぞ」

詠は少し肩をすくめて

「それはあいつらだけには当てはまらないのよ。兵糧は頼んでないのに民が持つて来てくれるし、それ以前に黒狼衆は自給自足で生活してるしね。兵に関しても志願者が後を絶たないらしいし、騎馬とかの軍備には徐庶がいるから問題ないのよ」

「… もう呼びかけだけで大陸制覇できるのでは？」

「… 否定できないのが怖いわね…」

まあ、それはともかく… 一番怖いのは筆頭… アイツよ」

「見た目は普通の男に見えるのです」

「アイツ切り替え激しいからね。」

… “黒狼” 姜維伯約。黒狼衆の長にして、大陸最高位の武人でもある。単独で穰陽に巣くっていた賊を殲滅した事もあるらしいしね」

「大陸有数の武人… ですか？」

「ええ。恋と同等の、ね。けどアイツの最も優れている点は… 統率力。」

「統率力… 軍師の必須能力なのです」

「ええ。それに頭もキレるから相当な奇策でもない限り見破られるわね…  
とにかく、この戦をよく見ておきなさい

黒狼衆が“大陸最強”と呼ばれる所以、その目に焼き付けておきなさい」

**最強の義勇軍〜黒き狼の胎動〜（前書き）**

愛紗±夢想です

こんなの愛紗じゃねえ！って人はすみません

大丈夫だぜって方は読んでみてやって下さい

最強の義勇軍〜黒き狼の胎動〜

「にしても圧巻だな…」

今日の前には黄巾党三万がいる

対する黒狼衆は陷奈の軍を入れて五千。普通ならば戦うまでもなく  
勝敗が決まる数差である

そう、普通ならば（……………）

「佳史！兵を集めたで！」

「鼓舞を頼む！」

「あいよ」

霞と愛紗が俺を呼びに来る

そして俺は黒狼衆の前に立ち

「てめえら！久方振りの戦だ！訓練サボってなまってねえだろうな  
！？」

一斉に雄叫びが上がる

「上等だ！…いいか！こつから先は訓練じゃねえ！真正銘、命の  
取り合いだ！…生きてえなら目の前の敵を屠れ！潰せ！蹂躞しろ！」

そこで一拍置く。先程と違って場は静まり返っている

「俺がお前らにする命令は一つだ！…生きる！生きて！再び！ここに戻って来い！全員で穰陽に帰るぞオオ！」

言い切った瞬間、天を裂くような怒号が響きわたる

士気が最高潮に達した今を逃す訳がない。

「高順隊は左翼！関羽隊は右翼！本隊は中央だ！張遼隊は作戦通りに動け！合図は俺が出す！」

指示を出せば即座に部隊が動き出す。訓練はきっちりこなしていたみたいだな

そして全隊が配置についたのを見計らって

「中央！出るぞ！全員俺に続けエエエ！！」

その合図と同時に戦が始まった

sideねね

「こ、これはなんの冗談なのですか…」

ついさつき、佳史殿（やけに恋がなついていたので真名を交換した）が兵を鼓舞して、戦が始まったのです

そして開戦からまだ一刻（約二時間）も経っていないのに…

「駆け抜けよ！敵本陣は目の前です！一気に決めますよ！」

「関羽隊！高順隊に遅れをとるな！一番駆けは我がとるぞ！」

すでに右翼と左翼が敵本陣直前まで迫っているのです！

しかも…

「くっ…退け退け！あんな奴ら相手にしてられねえよ！」

「まだ死にたくねえ！」

精神が弱い賊はどんどん逃亡するのですが

「……………旗を振れ！そして我慢は終わりだ！てめえら！思う存分戦場を駆けろ！」

「…合図や！いくで！黒狼衆の名…大陸中に響かせたろうやないか！」

張遼殿の伏兵によってことごとく打ち破られているのです…

しかも張遼殿が現れた事で、逃げ道があるから、と油断していた賊共の士気が一部を除いて下がっているのです！

「流石佳史ね。自ら囿になって最前線に立ち、賊が逃げ始める時期を読んで霞に指示、四方向から挟撃、賊の士気を下げながら殲滅なんてね」

…確かに。これを全てあの人一人で考えたとは…

「どうした賊共オ！俺の首はここだぞ！」

ああいうのを理想の将というのではないか。

ねねはそう思わずにいられませんでした

side out

愛紗 side

「臆するなっ！俺の背中を見失うな！全員俺に着いて来い！」

『おおおおおー！！！』

佳史が前が出る

始め私とその事を聞いた時、正直耳を疑った

しかし

『…俺はな、本当なら総大将なんて器じゃねえんだ』

『突然何を…』

『だからこそ！…俺は誰よりも、何よりも前に出る。兵達が道を見失わないように。俺が…黒狼衆の大將で在るために。今までだってそうしてきた。そしてこれからもだ』

危ういと思った。佳史が前に出る事ではない。反対こそするが、佳史ほどの武があれば滅多な事では危険にならないだろう。



『何故、そこまで…』

『俺の自己満足のため、だ。俺はせめて自分の仲間だけは護りたい。大陸制覇なんざどうでもいい…俺はそんな器じゃねえし、できる奴がやりあい。ただ愛紗がいて、黒狼衆の奴らがいて…ただ、みんなで笑って生きれば、不幸だろうが何だろうがそれでいい』

ああ、やっぱりだ

この人は、“在り方”が危ない

多分、佳史は…自分を犠牲にしても黒狼衆を護ろうとするだろう

文字通り、自らの命を犠牲にしても

全てを一人で背負うだろう

私達が笑って生きれるように

…気付いているか？

お前はさっき、笑って生きればいいと言ったが…その中に佳史を含んでいなかったんだぞ…？

side out

「てめえらアアア！勝ち鬨を上げるオオオ！」

開戦から約二刻

戦が終わった…勿論黒狼衆の勝利で

黄巾党約三万は全滅。対する黒狼衆の犠牲は五十に満たない

「今日の夜は宴だ！思う存分楽しんで死者を送ってやれ！」

その後、月達が俺達に礼を言って洛陽に向かって行った

そして何故か陷奈が黒狼に復帰した。まだ契約期間は残ってた筈なんだが…

「夜」

「……………」

遠くに皆の騒ぎ声が聞こえる

本当なら俺もあそこにいなきゃいけないんだろうが、どうしても人になりたくなるんだよな…

「…ふつ。言い訳は見苦しいな」

思考を断ち切るように酒を煽る

「…皆、ありがとう。そしてすまなかった…」

今まで支えてくれて、こんな俺に着いて来てくれて。

それなのに護れなくて、こんな所で死なせてしまって、家族を悲しませてしまつて。

「…お前らの願い、希望、野望。全部、全部俺が背負つて行く。俺が死ぬまで、お前らが忘れてもいいと言つてくれるまで背負い続ける。だから…安心して逝つてこい」

背負う事が、今俺にできる最高の手向けだから

それが、俺に課せられた業だから

なら、俺は背負い続ける。

「『今自分ができる全力を尽くせ。それが間違いだろうと、自分の信念を貫き通せ』…」

…なあ、

俺は…

side 愛紗

私は今佳史を探している

始めこそただ単純に宴会を楽しんでいたのだが…

「あつはつはつ！ドンドン酒持つてこーい！／＼／」

「いや、あの張遼様…もう酒が」

「あつはつはつ！冗談は顔だけにしいやあ？」

「……」orz

「ふふ、いいですか？好きな男子ができた場合：迷わず押し倒してしまいなさい！既成事実さえ作ってしまえば此方のものです！」

『ほっほっ……』

「誰か！姜維の旦那呼んで来い！」

「このままじゃ俺らの貞操が！」

「馬鹿やろう！本当に貞操の危機なのは旦那だ！」

「じゃあどうすんだ!？」

「張遼様がいればそれでいい」

「…旦那に犠牲になって貰おう」

『それだっ!』

…ツッコミが追いつかない

というか今大将売らなかつたか!？それでいいのか黒狼衆!？

後霞。お前今モテてるぞ？なのにそれでいいのか？酒が恋人なのか？

…という訳で佳史を探しているのだが…

「いないな…」

陣のどこを探しても佳史が見当たらない

途中何人かに見ていないか聞いてみたが、見た者は一人もいなかった

「後、まだ探してなくて佳史が行きそうなのは…戰場跡だけか…」

…しつこいようだが、佳史の“在り方”は本当に危うい

義勇軍とはいえ、黒狼衆の保有戦力は一国、もしくはそれ以上に相当する

朝廷の力が無に等しくなった今、肥沃で、商業も発達している穰陽が襲われるのは目に見えている

義勇軍だから拠点を変える、というのは佳史が許さないだろう

まだ数日しか見ていないが、穰陽の人々は佳史にとって家族も同じ…そんな風を感じたからだ

穰陽を護る以上、間違いなく犠牲は出るし、出すだろう

そして佳史はそれらを全て背負おうとする。一つ残らず、全てを

…果たしてそんな事が一人でできるのか？否、絶対に無理だ

どれだけ強くても必ずどこかで潰れてしまう

人は一人では生きていけないのだから

「『今自分ができる全力を尽くせ。それが間違いだろうと、自分の信念を貫き通せ』……」

ふと、佳史の声が聞こえた

消え入りそうな小さな声だったが、それでもはっきり聞こえた

「……なあ」

少し進むと、佳史は岩の上に座って泣いていた

それを見た瞬間、私は考えるより先に身体が動いていた

そしてそれと同時にある事を理解した

あの強くて弱い人を支えたい

この感情が、恋なんだと

side out

「……」

「……」

沈黙がその場を支配する

「……………」

「……………」

「…何の真似だ？愛紗」

俺が少し感傷に浸って黄昏ていると、突然後ろから愛紗に抱きつかれた

「…佳史が」

ポツリと、呟くように愛紗は話す

「佳史が、消えてしまいそうな、気がして…」

「……………」

「どこか、私達の…私の手の届かない所に行ってしまいそうで…」

「……………」

「そうなれば、私達はどうすればいい？

…行き場のなくなった私のこの想いは 「そこまでだ」「っ!？」

愛紗の言葉を半ば無理矢理遮り、体を離す

「その先は本当に想いを馳せる奴ができるまで取っておけ。

…で？関羽雲長。お前は黒狼衆に加わるのか否か。どうなんだ？」

「っ!？」

拒絶されたと思ったのか、薄く目に涙を貯める愛紗

…すまない。だが俺は…

「…入る」

「…そうか」

もう二度と、弱味を作るような真似はしない

「これからよろしくな、愛紗」

俺は握手をしようと手を差し出すが、愛紗は後ろを向いてしまう

55

「…お前に何があったのかは知らないし、私はお前を理解した訳じゃない。でも、それでもこの気持ちの本物だと言う事はわかる。だから」

くるりとこちらを向く

「いつか、貴方を振り向かせて見せます。ご主人様」

花が咲いたような笑顔で、俺にそう言い切った

…これから大変になりそうだ

参ったな、コレは



天の御遣い〜第一回佳史争奪戦〜

〜穰陽〜

董卓救援戦から早半月

愛紗が加わって、軍部はかなり充実してきたんだが…

「……………」

文官が足りねえ…より正確に言うなら優里級の文官がいねえ

「…優里、生きてるか…？」

「……………」

「優里？」

「…あれ？川の向こうに死んだお父さんがいる…」

「優里！？渡んなよ？絶対渡んなよ！？」

「今行くよ〜お父さん…」

「優里イイイイ！！！」

〜優里蘇生中〜

「…失礼しました」

「冗談キツイぞ優里…」

でもこの文官不足はかなり深刻だと思う

義勇軍だからただでさえ文字の読み書きできない奴が多いのに、穰陽の太守が政務持つてくるからな…

しかも悪気0（佳史を穰陽の太守にしたがっている）だから無碍にできねえしな

「なあ、優里…やっぱり文官募集した方が良くないか？」

「そうですね…このままでは私が佳史様が倒れた時にどうしようも無くなりますし…」

「ただ、アテがな…」

そう、文官を雇用するにもアテがない

適当に試験をしても、中途半端な文官しかいなければ意味がない

「…仕方ないですね。私がなんとかします」

「ん？何かアテでもあんのか？」

「はい。伊達に水鏡女学院をでていませんよ」

…あ。そういやそうだった。完全に忘れてた

「じゃあ頼むな。こつちもついでに文官探しするから」

「お願いします。でも、護衛（道案内）に霞さんが愛紗さんを連れて行って下さいよ？」

…今微妙に子供扱いされた気がする

「わかってるって」

俺と優里がどうして死ぬ一歩手間まで政務をしていたかと言うと、ただ単に俺が“五台山に天の御遣いが降りてくる”と言う噂を聞き、面白そうだから見に行こうと思ったからだ

始めはいつも通り脱走しようとしたんだが、運悪く優里に見つかり、即捕縛されて、護衛に霞か愛紗を連れて行く事（陷奈は政務ができるため除外）と5ヶ月分の政務を終わらせるのを条件にされた

まあさつき政務が終わったから後は護衛の件だけなんだが…

「だからウチが行く言うとするやる！愛紗はまだ黒狼衆に来て間あないんやから兵達ともっと信頼関係をつくるべきや！」

「だからこそ私が行くと言っている！信頼関係が完璧でないから調練もぎこちなくなるはずだ！だったら霞が調練、私が護衛なのが妥当なはずだ！」

なんたるな…ただの口喧嘩何だろうが、舌戦並みの真剣さがにじみ出てるんだが

まあ俺が何か言った所でやぶ蛇になるのはわかってるから何も言うつもりはないが

「（あゝもう！半ば正論やから反論でけへん！）だからと言ってずっとウチに調練任せる訳にはいかんやろ？やったら早めに慣れた方がええんちゃうか？」

「くっ…！（このままでは埒があかない…ここは出費が痛いけど仕方ない…）」

不意に愛紗が霞に近づいて何かを耳打ちする

「（なんや？交渉やったら受け付けへんで？）」

「（…老酒。一樽。）」

「（ぐっ…酒を引き合いに出すとは卑怯な…！けど佳史との二人旅をそう簡単に（二樽でどうだ？）乗った！）」

ん？話がついたか？

「佳史。今回は愛紗に護衛は任せるわ」

「……………了解」

「ご主人様？その間は一体何なのかじっくり話し合いますよ」  
「だって愛紗堅物真面目の融通きかずだしな」

「失礼な。ご主人様がずばらなだけです」

「その前にどうやって心を読んだ！？凄え的確だっただけに怖いんだが!？」

これは陥奈と霞の固有技だと思ってたんだが？

「「「愛の力です（や）」「」」

「もはや訳わかんねーよ。後陥奈。お前どっからわいてでた」

「そんな人を黒い彗星（Gのこと）みたいに」

「お前（変態）は人間の黒いアレだ」

「全く、佳史は愛情表現が下手なんですから…でも私はわかってますからね？」

何をだ。正直陥奈をあしらってるだけなんだが

「陥奈。多分…いや、絶対それは違う」

「せやな。それはただ単に面倒くさがられとるだけや」

おお…：ようやく霞がまともな事を…！

後愛紗、お前は優里と揃ってウチの良心だと信じてたぞ！

「「私<sup>ウチ</sup>への態度が愛情表現だ（や）」「」

前言撤回。お前らはウチの三大馬鹿だ

「というか愛紗、お前ドンドン霞と陷奈に毒されてないか？」

「ふっ。甘いですね。佳史は無意識に好きな人をイジメてしまう人なんです」

勝手に人を変態にすんな

「いや、佳史は好きな人には距離を取る」

俺は別に遠距離恋愛の趣味はない

「はん！甘いわ！ウチなんか佳史と一緒に寝た事あるからな！」

「なんだとオオ！？」

いつの話だ

そこからはもはや収集がつかなくなる

…イライラしてきたな

「とりあえず黙れ馬鹿共。陷奈は俺を変態の仲間にするな！愛紗はいい加減前の凜々しい感じに戻れ！霞はいつの話をしている！？それせいぜい4〜5歳くらいの時だろうが！」

「くくぐう…」「」

一応は黙ったものの、相変わらず火花を散らす三馬鹿

「あゝもう！とりあえずさっさと出発する！行くぞ愛紗！霞、  
！黒狼衆と華音の世話頼んだぞ？」

「はい」

「あ、待って下さい！」

さて、天の御遣いか…どんな奴だろうか？

天の御遣い〜第一回佳史争奪戦〜（後書き）

陥「高順ごと陥奈と！」

華「太史慈ごと華音の！」

「「お便りコーナー」

華「ちなみにタイトルは募集中です」

陥「このコーナーは作者の気まぐれで質問に答えようと言うコーナーです」

華「何か私たちがこの小説のキャラに聞きたい事があつたら感想に書いて欲しいな！それに作者のやる気も上がるしね」

陥「まあ、とにかく、感想に疑問が来れば作者がここに載せます（多分）」

華「でもネタバレとかストーリー進行上の問題に当たるようなのは無理だよ？適当にぼかすらしいから、勘がいい人はわかるカモだけど」

陥「…とりあえず結論だけ言いますと…」

「「お便りお待ちしてま〜す！」

陥「というか華音？貴女今回よくしゃべりますね？」



華「だって出番ないんだもん！ここらへんでアピールしとかないと  
！」

陥「…不憫ですね」

天の御遣いゝ義姉妹・ドジっ娘とチビッコとゝ

ゝ五台山ゝ

「いねえなあ…」

「そうですね…」

現在愛紗と五台山の麓辺りをうろついている

「やっぱり噂は偽物だったのでは？」

「いや、一概にそうとも言いきれねえぞ？まだ流星が落ちたって話も聞いてないし」

“流星と共に天より御遣いが現れる”

少し前から洛陽で流れ始めた噂。流星が落ちた時、幽州の五台山に天より御遣いが現れる…らしい（華音調べ）

偵察から帰って来た時の華音のはしゃぎようからして、ガセではないと思うのだが…

「　　ちゃーん！桃香お姉ちゃーん！」

「ん？」「ん？」

突然大きな声で誰かを呼ぶ声が聞こえた

その方向に顔を向けると、身の丈に合わない矛を持った赤い髪の子こい女の子がいた

そんなチビッコを一人にしておくのも気が引けたので、

「おい、どうしたんだチビッコ?」

「お兄ちゃん、誰?」

おいおい、ちよつと無防備すぎないか?

「俺は姜維。で、こつちのお姉ちゃんが関羽だ。で?こんな所でどうしたんだ?迷子か?」

「違うのだ!鈴々子供じゃないのだ!迷子は桃香お姉ちゃんなのだ!」

「姉ちゃんと一緒に来たのか?」

「うん!あのね、なんか“天の御遣い”って人がここに来るらしいのだ。だからお姉ちゃんとその人を見に来たのだ」

「へえ。えーと「鈴々は張飛つて言うのだ」…張飛。俺らも天の御遣いを見に来たんだ。だからお前さえ良かったらそのお姉ちゃんを探すの手伝ってやろうか?(暇つぶしに)」

心の声は聞こえなかったはずだ

…横で愛紗が軽く呆れてるけど聞こえなかったはずだ…あ。愛紗俺の心読めるじゃねえか

「ホント？じゃあお願いするのだ！」

にぱっと笑みを浮かべて喜ぶ張飛

「それでそのお姉ちゃんとやらは何か特徴などは無いのか？」

「そうだな。一応聞いておくか」

「うーん…お姉ちゃんはね、ドジなのだ」

「…他には？」

「とにかくどうしようもないくらいドジだから、見つけたらすぐわかるのだ！」

…こんなチビッコにドジドジ言われるって…

「うん…まあ、わかった」

「それでは三手に別れましょう。ご主人様は北、張飛は南東、私は南西。二刻後に見つかっても見つからなくてもここに集合でいいですね？」

「ああ」

「張飛もいいな？」

「うん…！」

そうして俺達は張飛の姉を探す事になったのだった

side???

「お〜い！鈴々ちゃん〜ん！」

どうしよう…鈴々ちゃんとはぐれちゃった

麓の村で天の御遣い様の噂を聞いて、鈴々ちゃんと二人で来たんだけど…鈴々ちゃんの体力に追いつけなくて…

「はふう〜…疲れたよ〜…」

今までずっと歩きっぱなしだったしね

偶々側にあったちようどいい大きさの岩に座り込む

暫く休憩していると…

ガサガサガサツ

「!？」

「…ん？オイ見ろよ！こんな所に可愛い姉ちゃんがいるぜ？」

「おっ！姉ちゃん、俺達と遊ばない？」

「大丈夫だって！ちゃんと気持ちよくしてやるからよ！」

そう思い思いに言って高笑いする黄色の布を額に巻いた男の人達

私は怖くて声が出せなかったけど、勇気を振り絞って剣を抜いて男の人達と対峙する

「何？俺達とやる気？止めとけ止めとけ」

「震えてんじゃねえか」

「ほら、そんな物騒なもん捨てて…さっ！」

鈍い音と共に、私が持っていた剣が弾き飛ばされた

対抗する手段を失った私は、ただ怯えて後ずさるしかなかった

「い、嫌…」

「残念だったなあ。こんな所に一人でいたのが運の尽きだったな」

「誰か…誰か助けて!!」

「無駄だって。こんな辺鄙な所そうそう人が来るわけないからな！」

そう言って近づいて来る男の人に、無意識で急所蹴りをしてしまった

「うがっ!？」

「テメエこのアマ！人が下手にでてりゃ調子に乗りやがって！」

私が抵抗した瞬間、今までの態度が嘘のように攻撃的になる

そして武器を抜いて私に襲いかかって来た

…ごめんなさい。鈴々ちゃん。私はここまでみたい

私は覚悟を決めて目を閉じ

「女一人に何人掛かりだ」

『ふべらっ!?!』

ずに前を見ると、一人の変った服を着た男の人が賊さんをシバいていた

side out

張飛の姉を探していたら突然女の悲鳴らしき声が聞こえた

放っておくのも寝起きが悪いので向かってみると案の定黄巾党に女が襲われていた

…つか、なあ。女一人に男三人掛かりで襲いかかるって…

まあ、助けるから問題ないけど

「女一人に何人掛かりだ」

俺は素早く賊の前に出て賊が何か言う前に鳩尾に拳を叩き込み、残りの二人には武器 黒天霸狼（戟）で眠ってもらった

「…ふう、大丈夫か？」

「ふえ？あ、はい。あの…助けられてありがとうございます」  
律儀に頭を下げる女

「いや、気にすんな。偶々人を探してたら声が聞こえただけだし」  
そう言ってもお礼を言って来るので、仕方なく人探しを手伝っても  
らう事にした

どうやらコイツも人を探していたようで、ちょうどいいとの事だ

「あ、自己紹介がまだでしたね！私は劉備、字は玄德、真名は桃香  
です」

…多分何を言っても真名は預けるんだろうなあ

「俺は姜維、字は伯約、真名は佳史だ。よろしく」

「はい！よろしくお願ひします佳史さん」

「あ…敬語はいらねえ。何かむず痒くなるし」

「そう？わかったよ佳史」

その後は特に何も見つからず、結局集合場所に戻る事になった

「愛紗〜！」



「あ、ご主人様。お疲れ様です。…見つかりましたか？」

「いや、全く。手掛かりすらねえよ」

情報がドジだって言う事だけで見付かる訳がない

「そうですね…こちらも見つかりませんでした

…ところでそちらの方は？」

「ん？ああ、コイツは」

「ただいまなのだーっ！！」

俺の言葉が張飛の元気いっぱいの声に遮られた

「ん、お帰りチビッ」

「だから鈴々はチビッコじゃないのだ！」

「はいはい。で？どうだったんだ？チビッ」

「むきーっ！なのだ！もう勘弁ならないのだっ！」

…張飛をからかうのが意外と面白い事がわかった

「こら。鈴々ちゃん？あまり人様に迷惑掛けちゃダメだよ？」

「いくら桃香お姉ちゃんの言う事でも許せる事と許せない事が…っ  
て」



## 天の御遣いゝ種馬（バカ）降臨ゝ

ゝ前回のあらすじゝ

黄巾党から助けた人が張飛の姉ちゃんでした、まる

「つーか張飛！特徴がドジってだけでわかる訳ねーだろ！」

「でも実際お兄ちゃんは桃香お姉ちゃんを連れて来れたのだ！鈴々正しかったのだっ！」

「思いつきり偶々だ！コイツ特徴の塊だろ！巨乳とか桃髪とかバカとか…巨乳とか！」

「ご主人様？後でじつつくり話し合いますようか」

やべえ…ふざけすぎた…愛紗の目が据わってやがる

「そつだよ鈴々ちゃん。私ドジじゃないもん！」

子供のよつにぶくつと頬を膨らまして怒る劉備…なんか和む

「桃香お姉ちゃんがドジなのは大陸共通のしんり？なのだ」

「」「」そこまで言う（か）！？」「」

「……………」orz

「ちよ、劉備殿！？」

「いいんですよ関羽さん…どうせ私はドジでバカでお人好しだから…」

劉備がこれ以上ないくらい沈んでいる…

「張飛！劉備殿がなんか…なんか危ないぞ！？」

「任せるのだ！…大丈夫なのだ。お姉ちゃんがバカでドジでダメダメでも世の中はまわるのだ！」

あれ？トドメさしてね？

「……………死のう」

「張飛！お前これ…余計酷くなっているではないかあああ！！」

「あれえ？おつかしいなあ。お姉ちゃんの幼なじみの方がお姉ちゃんはこれで元気になるって言ってたのだ」

「鬼だ！そいつは紛れもなく鬼だ！」

「……………ねえ、三人共。どこか崖とか滝とか知らない？ちよっと逝ってみたいんだ…」

「劉備殿！気を確かに！」

「ちよ！？目が虚ろだぞ！帰って来い！現実に帰って来い！」

その後、劉備が帰って来るまで一刻かかった

「…つたく、めちやくちや疲れたぞ…」

「『生まれてきてごめんなさい』とか言い出した時にはもうダメかと思いましたがからね…」

「『ごめんなさい(なのだ)っ!』」

腰を90°に曲げて謝る劉備と張飛

にしても本当に疲れた…

「まあ、この借りはいつか霞の酒代(一年分)とかで返してもらおうとして…」

「そんなのでいいんですか?」

言ったな?そんなのって言ったな?

クイッククイック  
「…劉備殿」

「??」

「…あのですね、霞の酒代は………くらいですよ…あくまで平均ですけど」

「すみませんでした!それだけは勘弁して下さい!」

…値段聞いて一瞬で態度変わったなオイ

「まあ、そこらへんの話し合いは後にして……!?!」

俺がまた劉備をどうやってイジメて遊ぼうかと考えていると、突然  
周囲が光に包まれた

「くっ!?」

「ふええ!?」

「にゃ!?」

「ちっ!妖あやかしの類か!」

数秒後に光は収まった

油断せずに周りを警戒してみたが、特に気配もなかったので、とり  
あえず警戒をとく

「…全員無事か?」

「はい」

「うん」

「しかし…今の光は一体…?」

「もしかしたら御遣い様が来たのかな?」

「…可能性はあるな。よし!探してみるか!」

その後、俺達はとりあえず辺りを見回しながら歩いた

さっきのが妖ではないと決まった訳ではないので、全員固まって動いているから効率は悪いが…

「あ！あれっぼいのだ！」

「ん？…ってオイ。御遣いなのに運悪すぎだろ…」

張飛が指差した方向には、さっき劉備に絡んでいた賊に絡まれている天の御遣い（つぼい人）がいた

「二人ともよくわかりますね…私には点みたいにしか見えません」

「私もだよ…」

「いや、呑気に言ってる場合じゃねえからな！？へタすつと死ぬぞ？御遣い」

「ええええええ！？」

今更かい お前の言い方が原因

「急ぐぞ…って御遣い武器弾かれてんじゃねえか！！」

「ええええええええ！？」

「ご主人様！申し訳ございませんが先行して下さい！後から必ず追いつきます！」

「わかった！」

俺は全速力で御遣いの所に向かった

side 一刀

よし、とりあえず落ち着け俺！

落ち着いて今日の事を思い出せ…！

「おい、兄ちゃん」

朝起きて、学校行って、部活に行こうとしたけど及川に捕まって…  
ってそうだ！あの後なんかよくわからない泥棒と喧嘩？になって…  
なっ…

……

「おい！聞いてんのか！」

…気付いたらここにいたんだった

やっべえ。何にもわからない。

「おいこらガキ！」

「うるさい！黙ってる！こっちは取り込み中なんだよ！」



「あ、はい。すみません…じゃねえよコラガキィ！」

見渡す限り山、荒野、荒野、チビ、ノツポ、デブ、山、荒野…って  
なんか変なの混ざってなかったか？

あれ？明らか人いなかった？

っーか

「あんたら誰？」

「…今更かよ！」「…」

気付かなかったんだからしょうがないじゃないか

「まあ、いい。金目のもん置いて行きやがれ！」

「はあ？」

何これ？今時追い剥ぎの真似事か？…よく見たらこの人達の格好も  
コスプレっぽいし

「さっさと置いて行けって言ってるんだよ！」

「うわっ！？」

ノツポが剣みたいなのを俺に振り回して来る

何とか避けれたが、浅く頬を斬られた（……………）

…つて本物!?

とつさに近くに落ちていた(ここに来るまで持っていた)木刀を構えたが、すぐに斬り飛ばされた

「おいおい、その服は斬るなよ?高く売れそうだしなあ」

「わかってるよ」

ああ、俺は死ぬのか…

なんとなくそう感じて、諦めようとした時

ギイン

「…つと、危ねえ危ねえ」

槍?を持った男に助けられた

side out

ふう〜…何とか間に合ったか…

…ま、とりあえずは

「な!?!お前は!」

「…よお。テメエらよっぽど命がいらねえみたいだな…」

コイツらへのお仕置きが先か

く取り(バキッ)込み中の(ギヤアア…)為、し(た、助けっ!?)  
ば(さーせんしたああ!!) (らくお待ち下さい…)

「…ふう、こんなもんか?」

「いや、聞かれても」

…とりあえず賊を頭以外が出ないように埋めたんだが…

「まあ、とにかく助けられてありがとう。俺は北郷一刀って言うんだ」

「気にすんな。目の前で死なれると寝覚めが悪くなるからな。…で、早速で悪いが質問いいか?」

「その前に君の名前を教えてくださいませんか?」

「ああ、すまん、忘れてた。俺は姜維。字は伯約だ」

「へえ、姜維…姜維!?!」

俺の名前を聞くなり急に悶え始めた北郷

…そんなに変な名前か?俺…

「姜維ってあの姜維だよな?…そうなるここは後漢末期?…でも… (ブツブツ)」

「おい北郷。戻ってこい」

「…なあ、姜維？お前ってどこかに仕官してたりする？」

「…？いや？どこにもしてねえけど？」

「じゃあ「ご主人様」！！」「？」

愛紗様御一行到着です

「遅かったな。もう終わらせたぞ？」

「いや、それはその………それ生きてるんですか？」

「一応」

頭以外が埋まっている賊を見せると、途端に引きつった笑みを浮かべる愛紗

「…あ、申し訳ございません御遣い様。申し遅れました。姓を関、名を羽、字を雲長と申します」

「あ、私は劉備、字は玄德です。よろしく願いしますね」

「鈴々は張飛なのだ！」

「あ、俺は北郷一刀って言うんだ。（へ？シヨクのトップ3！？何でこんな所にいんの？）つか今関羽さん、姜維の事ご主人様って呼んでなかったか！？そもそも何で姜維以外女の子になってんの！？）

「

北郷が一人百面相をしている…なんか不気味だ

…というかこんなのが天の御遣いねえ…

確かに人を惹き付けそうな感じだがそれだけなんだよな

…よし！

「という訳で帰るぞ愛紗！」

「「「「「どういう訳で（ですか）！？」「」「」

満場一致のツッコミいただきました

「だって俺ただ単に御遣いってどんなのか見にきただけだし」

「ええそつでしょうとも。貴方はそういう人だと言つのはわかっ  
ますよ」

「あ、でも優里との約束もあるしなあ…噂を信じて河内でも行つて  
みっか」

「私の話聞いてますか？」

と、俺が適当に愛紗を弄ってたら、どうやら御遣いは劉備に協力す  
るみたいで

とりあえず、劉備達は公孫瓚の所に行くようだ

俺達とは真逆の方向だったので、その場で別れた

そして河内に向けて移動する途中

「…ご主人様、良かったのですか？」

突然愛紗がそんな質問をしてきた

「何がだ？」

「御遣い殿を黒狼衆に迎えれば風評も上がります。それに周りの賊への牽制にもなると思ったのですが…」

…やっぱり愛紗には隠せねえか

「…確かに御遣いの利点は大きい。けど、その利点のどれもが今の黒狼衆にはいらねえんだよ」

知名度も民の評判も事足りてる

「それに劉備：アイツは多分無意識だが大徳の器だ。まだまだ未完の神器だが…ヘタすりゃ化ける」

「ハア…（またご主人様の悪い癖が…）」

「そんな器に御遣いが着いた…面白いだろ？」

「ソーデスネ」

… 何故か棒読みだったのは後でお仕置きするとして…

面白い事になりそうだ

天の御遣いゝ種馬（バカ）降臨ゝ（後書き）

華「華音と！」

陷「陷奈の！」

「「お便りコーナー（仮）〜！」」

華「って言ってもまだ質問皆無なんだよね」

陷「感想は随時お待ちしていますので、ドシドシ書いちゃって下さいー！」

「「感想お待ちしてま〜す」「」「」



外伝・後悔〜桜、散る頃〜

〜穰陽〜

「ご主人様〜？ご主人様〜！」

「ん？愛紗？どないしたんや？」

「貴女が宮城内で大声を出すなんて珍しいですね」

霞と陷奈が愛紗の声を聞きつけて来た

「いや、ちよつと、な。それよりご主人様を見ていないか？」

「ん〜…そついや今朝から会ってないな〜…」

「私もですね…すみません。お役に立てなくて。お詫びに今度私の講義を…」

「いらん」

愛紗が拒否した瞬間、地面に女座りで崩れ落ちる陷奈…自業自得である

「にしてもおかしーなあ。佳史やったら朝絶対一回は見かけんのに…」

「お兄ィなら一週間くらい帰って来ないよ？」

「「のわっ!?!」」

いきなり気配もなく現れる華音。とてつもなく心臓に悪い

「なんだ華音か…あまり脅かすな…」

「心臓止まるかと思ったわ…」

「あはは〜ごめんごめん。気配くらい消せないと隠密なんてやってらんないからさ〜」

「まあ今はそれは置いておくとして…一週間位帰って来ないとは？」

「うん。お兄イは毎年この季節になるといつの間にかどっかに行っちゃうんだ。しかもいつもは仕事をさぼって抜け出すのに、この時だけはしっかり終わらせて」

「ああ、そついや毎年この時期はおらんな」

「そつだったのか」

納得する愛紗と霞

「行き先はわからないのですか？」

陷奈復活

「ん〜…一回つけてみた事はあるんだけど…新野らへんで綺麗に撒かれちゃった」

ペロツと舌を出す華音

「そうか…じゃあ帰って来るのを待つか」

「そつやな」

「ところで愛紗。玲夜が厨房でぶっ倒れて痙攣してたんだけど？」

「問題ない。予想通りだ（痙攣は予想外だがな）」

「ふ〜ん…ならいつか」

それでいいのか黒狼衆…

く?????

「……………」

目を閉じて目の前の墓標に黙禱を捧げている佳史

一分程して目を開ける

「…久しぶりだな。淡華<sup>おつが</sup>」

そつと手に持っていた花を備える

「今回も千日紅だ…変わり映えが無くて悪いな。どうせお前の事だからほつぺた膨らまして『なんで年に一回しか来ないの!』とか言

ってんだろつな…」

そう言っつて微笑む佳史

それはいつもの儂い笑みではなく、心からでる自然な笑みだった

「…義勇軍も漸く軌道に乗って来た。武官も文官も充実してるし、戦力も問題ない。何か太守にさせられそうな気がしなくもないけどな

…漸く、漸くここまで来た。お前の信念…“誠”を貫いて…やっつとここまで来れた

全く、お前がいたらここまで時間かからなかったのにな」

少しおどけたように言っつ佳史

しかし、その顔には涙が伝っていた

「…そんな事言えた義理じゃねえよな。でも…これだけは…譲れねえんだよ。

…悪い。また来年来るわ。あの世でも人様に迷惑かけんなよ？…また、な」

そう言っつて佳史はその場を去る。

流れ落ちる涙に気付かぬフリをしながら…

「お母様〜！お姉様〜！早く早く〜！」

「そう慌てんなって蒲公英！母様も早く行かねーと！」

「わかってるよ…！たく、そのせつかちなのは誰に似たのやら…」

「紛れもなくアンタだよ！」

「…ん？やっぱりアイツが先だったか」

「アイツ？」

「ああ、アンタらはここに来るの初めてだったね。この墓には私を含めて三人が来るのさ」

「へえ…この人そんなにすごい人だったの？」

「ああ…そこにいるだけで周りが明るくなってね…太陽みたいな女だったよ」

「ふ〜ん…」

「…どうやらアイツもまだ淡華に操立ててるみたいだしね…」

「…何か訳ありみたいだな」

「ああ…そりゃあとてつもない訳がある。…馬鹿だよアイツも。淡華なら真っ先にアイツの幸せを願うだろうに…」

「……………」

「…しんみりさせちまったね。さあ、早く酒と花を備えて帰ろうか」

「はい」

「わかってるよ」

「（佳史…忘れるとは言わないが…そのままだとアンタ…いつか壊れちまうよ…？）」

“ 鐘会 土季 真名を淡華

涼州の英霊、ここに眠る ”

千日紅の花言葉は…

“ 変わらぬ思いを貴女に捧ぐ ”

出来ない事、やらない事

「…遠いな」

「そうですね…」

劉備達と別れてから3日が経った

…が、

「まさか五台山から河内までがこんなに遠いとは…」

「計算してなかったんですか！？どこまで自由人なんですか貴方は！」

返す言葉もございません…

今回俺が河内に探索しに行こうと思ったのは、まだ誰の手も入っていない場所だからだ

河内は月の領地だが、今までの本拠地が天水だったからかまだ探索まではしていないらしい。

長沙ら辺でも良かったんだが…彼処江賊クソ多いしな…

穰陽は既に探しきった（大半が劉表に持っていかれた）し、近場で  
も曹操の領地なんかは論外だからな

呉の方は雪蓮達に譲ってやりたいから除外だ



「後は優里が頼りなんだがなあ……」

「？何か言いましたか？」

「いや、別に……お！あれじゃねえか？」

まだかなり遠いが、街らしき物が見える

「あ、本当で……ッ！」

急に苦い顔をする愛紗。それを訝しんでもう一度街を見る

「……チツ！急ぐぞ愛紗！」

「はい！」

俺達は全速力で街に向かう

河内の街からは、黒煙が大量に延びていた

「……どうやら、襲われた後みたいだな」

河内の様子は酷いものだった

家屋は壊され、辺り構わず火を放たれ、町人は殺されていた

「……………」

愛紗を見ると、悔しそうに唇を噛みしめ、拳を握っていた

「…愛紗。感情に流されんなよ。今できる事を確実に、だ」

「…はい」

「よし。まずは生き残った人を探すぞ。俺は東、お前は西だ。見つかったら大声で呼べ。この静かさなら多分届くはずだ」

「わかりました！」

「見つかったのか？」

愛紗の声を聞きつけて、その声を頼りに合流した

「はい！今は町人全員が酒家に集まっているそうです」

「…よし、俺は酒家に行く。愛紗は他に生き残った人がいないか探してくれ」

「御意！」

「…何だこれ」

酒家に入ったのはいいが、重い空気が場を支配していた

…何より町人に生気が全くない

「…何だ？悪いが今は出せるもんねえぞ？」

「わかつてる…とりあえず何があつたんだ？」

「見てわかんないか？黄巾党だよ。アイツらが大軍で襲って来たんだ」

「太守は応戦したのか？」

「いや。私兵連れてさつさと逃げやがったよ。自警団が応戦したけど全滅でな。偶々ここにいた武人の女の子にビビって逃げに行ったが…」

月…間に合わなかったのか？

いや、時間はあつた筈だ…となると、洛陽で権力争いにも巻き込まれて詠が動けない状況か…？

「お前らは自分で戦おうとしたのか？」

「無理に決まってるんだろ。訓練された自警団ですら全滅だぜ？素人の俺達が適うわけねえ」

「それでも 「無駄」…?」

急に声を被せられたのでそっちを見ると、無駄にデカイ斧 ありやあ大戦斧か? を持った女の子がいた

「…お前がさつき話に出てた武人か?」

「…話は聞いてないけど、多分そう」

「無駄ってのはどういう意味だ?」

「…私もずっと戦おうと言った。でも、この人達全員に戦意が無い。無理に誘っても死ぬだけ」

要所だけを抜き出した回答ありがとう

「…お前は優しいんだな」

「……………?」

きよとんと首を傾げる女の子

まあ今はコイツ等にやる気を出させるのが先だな

「で? テメエ等は自分の身可愛さにこんな女の子一人に戦わせた、と」

だんだん町人の呼び方がずさんになってるって? わざとさ

「…仕方ないだろう。俺達が戦ったって足手まといだ。だから」

尻尾まいて家の中でブルブル震えてましたっけ？」　なんだと！  
？」

「だってそうだろ？死にたくないから戦わない。それはつまり町も他人もどうなっただっていいから自分だけは生き延びたいって事だろ？」

「黙って聞いていれば…テメエに何がわかる！？余所者がしゃしゃり出てんじゃねえ！」

「ああ、わかんねえよ。だったら逆に聞くがお前らに俺がわかんのか？」

「……………」

「人は人で在る限り他人を完璧に理解するなんざ不可能なんだよ

…つと、話がそれたな。俺はな、武も知も無いのに町を守るために戦った奴を知ってる。ちょうど今のテメエ等と同じ…いや、もつと酷い状況だった」

「……………」

「力がない？それがなんだ。勝てる訳が無い？誰が決めた。この世に絶対なんかねえ！だからと言って何もしないで状況が良くなる訳でもねえ！だったら…自らの手で未来を掴みやがれ！」

町人たちの目に生気が戻る

少しずつ重い空気が吹き飛ばされていく

「テメエ等がここを守るってんなら喜んで力を貸してやる

…さあ、河内の民よ。貴様等はただ死を待つ獲物か？それとも、街を守る信念を持った人か？

選べ！ただ死ぬか、生きた証を示すのか！！」

町人達は、迷わなかった

??? side

…すごい。それ以外の言葉が見つからない

私があれば言っても何の関心も示さなかった人達が、戦意を露わにしている

それをしたのは、私と同じ年くらいの男の人

…でも、多分私とは経験も力も段違い

私じゃ絶対に叶わない…そう思わせる何かがあった

だからこそ、見極めたい

私が主と仰ぐだけの、器があるかどうかを…

side out

目の前には、大地を覆い尽くす人、人、人  
対するこちらは僅か千八百

そう。再び黄巾党が河内に攻めて来たのだ

「…ご主人様。貴方バカですか？バカですね？バカなんですか？」

「まさかの三段活用！？」

「いえ！今日こそは言わせて貰います！貴方アホですか！！」

「…大丈夫。姜維は殺しても死なない」

「ちょ！？徐晃！？流石に死ぬからな！？」

今更だが何故愛紗に説教食らってるかと言つと…

「…私は協力する」

先ずはさっきの女の子が参加を決意した

そしてそれに弾かれたように…

「お、俺もだ！俺も戦う！」

「俺もだ!」「俺だって!」

次々と参加の声があがる

「よし!テメエ等!全員この街を守りてえって事で依存ねえな!？」

『当たり前だアア!!!』

「ご主人様、もう生き残った人は…って何があったんですか!？」

「お、愛紗。ちょうどいい。戦だ!」

「はい?」

「あ、その女の子。お前もついて来てくれ。簡単に策立てるぞ」

「…わかった」

「ちょ!?!話についていけないんですが!?!」

「成る程…そういう事でしたか」

「よし、まずは…俺は姜維。字は伯約。んでこっちが関羽だ」

「…徐晃。字は公明」

「ん。徐晃、お前軍を率いた経験は?」



「…あんまり無い。二週間前に義勇軍と街を守った時が最後」

…なら、そこそこ任せられるか…

「愛紗。今の戦力は？」

「約千八百です。しかも大半が素人ですね」

「…よし、とりあえず愛紗は少しでいいから基礎を教えてやってくれ」

「御意！」

愛紗が酒家に戻って行く

「さて…めんどいのが行った所で」

「…めんどい？」

「お説教がな…」

「…なるほど」

「まあそれはいい。今回はお前に千人率いて貰うぞ？」

「…ん。でも、姜維は？」

「ん？俺は五百で愛紗が三百だ」

「…私が一番多くていいの？」

「ああ。今回の戦の鍵は…俺とお前だからな」

河内防衛戦、地を駆る天狼

「さて、向こうは…」

あの後愛紗をなだめてすかして小突いて撫でたら何とか納得してくれた

なので、何とも都合良く再び攻め入ってきた（結構近場で陣を張っていた）黄巾党の様子見をしているんだが…

「まさか何の策も立てずに突っ込んでくるだけとは…」

「…統率もとれてない。馬鹿？」

「否定はしねえが…お前ら案外毒舌なのな」

見た目のステキさは所詮見た目だ

「…さて、馬鹿共が馬鹿なのも確認したし、さっさと戻って出陣の準備だ」

「はい!」「…ん」

その後、街の酒家に戻って、町人に戦の準備をして欲しいと告げて、簡単に策のおさらいをした

そして…

「ご主人様？もうすぐ敵と接触しますが、鼓舞しなくていいのですか？」

「今の士気だと別に必要ないだろ？それに俺達は所詮余所者だ。そんな奴に仕切られても士気が下がるだけだ。それに…この戦は町人達自身が戦う事に意味があるんだからな」

今回の戦はただの防衛戦じゃない

町人達自身が決めた、自身の街と仲間を守るための戦い

そんな戦いでしゃしゃり出る程凶々しい性格はしてないつもりだ

「…でも、こっちは殆ど素人。勢いだけで行けば全滅するかもしれない」

「わかってるよ。そのための策と保険だ。今回の策の一番の鍵はお前にかかってるからな？頼むぜ？」

そう言っつて徐晃の頭を撫でる

「…がんばる／＼／（グッ）」

「……………（ムスッ）」

何故か徐晃は赤くなり、愛紗は機嫌が悪くなった

…本当に何でだ

まあ、今は…

「さあ、そろそろ戦が始まる。二人共…気合い入れてけよ？」

「はい!」「うん」

「姜維隊!全員俺について来い!黄巾党をここで葬るぞ!」

『おおー!ー!ー!』

二人の返事を聞くや否や、俺はすぐに隊を動かした

…さて、人の命を背負ってる以上、テメエ等に情けも容赦もない

全力で潰させて貰うぜ?黄巾党サンよお

徐晃 side

いよいよ戦が始まる

私達に声をかけてすぐに姜維は行ってしまった

…もう少し撫でられていたかった

「では徐晃。そちらは頼むぞ。ご主人様をどうか守ってやってくれ」

「…心配ない。元からそのつもり。関羽も…街をお願い」

むしろ姜維には守られる気もするけど

「ふっ…無論だ。守備は任せろ。鼠一匹通させん

…関羽隊！これより街の守備にかかるぞ！百人は弓を持って城壁に  
！残りは私とここに待機だ！」

関羽も手際良く兵をまとめて指示を出す

…やっぱりこの二人は凄い。私じゃとてもここまで上手く兵を纏め  
られないから

…でも

「…徐晃隊。私達も出る。後ろは関羽隊が守ってくれ。だから…  
振り向かないで。焦らないで。私達の街は私達で守る！」

『おおー！！！！！！！』

自分の故郷は…自分達の手で守りたいから。だから…この策は絶対に  
成功させる！

side out

「死ねえええ！！！」

「お前が死ねええ！！！！！」

「テメエ等のせいで妻が死んだんだ！！！」

「んなもん知るか！！！」

目の前で繰り広げられる罵倒の嵐

…これがまた、戦場にいると言う事を再確認させられる

「ぐあっ」

「がはっ！」

そして戦場にいるという事は人を殺すと同義だ

人を殺すと言う事は人が死ぬと言う事。

敵が死ぬと言う事は味方が死ぬと言う事。

…何度も、何度も目にした光景

「…やっぱり慣れねえな」

慣れてしまえばどれだけ楽か

落ちてしまえばどれだけ幸せか

…戯れ言か

「がっ!？」

「ぎぎっ」

…やはり、地力の差で少しずつだが、こちらの勢いが殺されていく

徐晃も前で戦っているが、相手の数が多すぎて追いつかない

「…もう少し！もう少しだけ耐えて…！私達の街は私達で守るんだから…！」

『うおおおおおおお！！！！』

「前線で戦っている仲間を思え！ここは絶対に死守するぞ！」

『おおおおおおお！！！！』

士気は本当に高い位置で保たれている

…士気だけは

「（士気だけは何とか生きている…）」

「（…けど、数の差が圧倒的すぎる）」

「（このままだと…危ない…！！）」

そう、問題は数の差だった

「佳史…！まだなの…！！」

「そんなに焦ってんじゃねえよ」

そんな声がしたかと思うと…



「待たせたなお前ら！今が勝負所だ！行くぞ！戦場を蹂躞しろおおお！！」

『おおおおおおおお！！！！！』

突如として黄巾党の背後から姜維隊が現れて、宣言通り黄巾党を蹂躞していく

「…今を逃さないで！一気に決める…！」

「今だ！好機を逃すな！ここを逃せば勝ちはないと心得る！」

『うおおおおおお！！！！』

姜維の登場によって大勢が完全に切り替わる

そして程なくして…

「…敵総大将、徐公明が打ち取った！」

敵総大将討ち死にによって、戦が終わった

黄巾党死者・約一万四千

河内軍死者・約二百

そしてこの戦の戦法は、奇しくも後世にて“桶狭間の戦い”と呼ばれる戦で再現される事となる

とりあえずオリキャラ設定

「ども〜！本編で全く出番が無い太史慈こと華音です〜！」

「あんま卑屈になんたって…」

姜維こと佳史だ。で？今日は何の用事だ？黒（作者）にとりあえずここに來いと言われたんだが」

「えつと…今回はね〜、とりあえず今出てるオリキャラの設定を出しておきたいらしいよ？」

「作者は無能の癖にやたらオリキャラ作ってるからな…その内華音みたいに何人か空気になるんじゃないかねえか？」

「人のコンプレックスをザクザクと…お兄ィ？覚悟はできてる？」

「ん？…まずは俺からみたいだな。んじゃ、どうぞ！」

「聞けええええええ！！！」

「うおっ！？華音！？危ないから小太刀をふりま…ギャアアア…」

姜維 伯約 佳史

武器…黒天霸狼（戟）、刀二本（？）

容姿…黒髪赤眼で一刃を上の中とすれば上の上の上。基本的には着

流しのようなものに羽織りを着ている

本編の主人公。“黒狼”、“天狼”などの異名を持ち、それにふさわしいだけの力を持つ

統率力と武力に優れ、自ら前線に立って兵を引っ張る。そのため、兵達にはかなり慕われている

性格は一言で言えば自由で、愛紗と優里が手を焼くほど気がついたら部屋にいないなんて事はざらである

しかも抜け出す度に新しい人材やスポンサーを見つけてくるので下手に注意ができない

密かにファンクラブ的なものが存在している

戦闘スタイルは力より速さに頼っていて、恋とは正反対の戦い方（先の先をとる）をする

「はい、と言う訳でお兄イでした〜」

「（あ、危ねー…）どんどん行くぞ？次は…華音らしい」

「私？それじゃ私です！どぞ〜！」

太史慈      子義      華音

武器：小太刀（無銘）四本、暗器

容姿…身長は思春と同じくらい。髪を後ろでポニーテールにしている。超スレンダー体型

佳史の義妹で、黒狼衆隠密部隊隊長。基本的には佳史と同じように自由な性格で、自分にも人にも甘いしかし仕事には厳しい一面もあり、与えられた任務や責任はしっかりと果たす

素直で裏表が無く、黒狼衆で佳史を純粹に慕っている唯一の幹部  
黒狼衆の中で自分だけ胸が小さいのがコンプレックスである

「小さくないもん！まだ成長するもん！」

「あゝ…はいはい。無駄な足掻きは適当に切り上げて次行くぞ」

「ちょ！？お兄ィヒドいよ！」

「次は…優里です。どうぞ」

「無視！？ねえちよつと〜！」

徐庶      元直      優里

武器…小鳥<sup>トス</sup>

容姿…身長は稟より少し小さいくらいで、髪は背中につくくらい長く、横で纏められている

黒狼衆筆頭軍師で、政治方面に優れている。水鏡塾出身

黒狼衆で唯一、何の疑いもない完璧な常識人で、“黒狼衆の良心”と呼ばれる程面倒見がいい

武力自体は余り高くないが、それでも一般兵には負けない過去に荒れていた時期があり、キレるとその頃の口調に戻り、荒々しくなる

朱里や雛里の姉のような存在でもある

「優里姉を一言で表すと？」

「…常識人だな。それが裏表が激しい」

「でも私優里姉がキレたとこ見たことないよ？」

「そりゃ隠してるからな。アイツにとって忘れたい過去だろうし」

「んじゃ優里姉はここまでにして、次は…陥奈です！」

高順      ???      陥奈

武器…落陣槍（槍）

容姿…身長は周喩くらい。髪は腰まであって、くくらずに下ろしている。穏以上の爆乳

黒狼衆の切り込み隊長的なポジションで、相手がそれ程強くなければあつという間に敵本陣を陥落させることから“陥陣営”と言つ二つ名がついた

見た目は落ち着いた大人のお姉さん（ただし霞と同一年）だが、中身はかなりエロい。黒狼衆の女兵士を集めて性についての講義をするくらいエロい

スタイルも抜群なので、たちが悪く、困った人でもある  
しかし仕事については政務から調練までかなりの精度でこなす万能タイプ

霞の幼なじみであり、黒狼衆に入ったのも霞の紹介である

「 陥奈さんを一言で表すと? 」

「 変態、それが変態 」

「 結局変態じゃん 」

「 お前はアイツの恐ろしさを知らないからな… 」

「 何かあつたの? 」

「ああ…愛紗がヤツの講義を受けて以来、やたらと貞操の危機が増えた…」

「それは…ご愁傷様だね…」

「……（泣）」

「…お兄イが壊れたので次行くよ？最後は最新のオリキャラ！徐晃さんです！どうぞ！」

徐晃

公明

椿姫つばき

武器…信華一刀（大戦斧）

容姿…身長は愛紗と同じくらい。髪は後ろでひとまとめにしている。割とツリ目だが、そんなにキツくはない

河内で大軍を相手にはほぼ援軍なしで黄巾党を追い払ったほどの豪傑見た目はクールビューティーというのがしっくりくるが、見た目に反して頭を撫でられるのと甘いものが好きという子供っぽい一面もある

話し方が独特で、要点をまとめた箇条書きのような話し方をするとともに一途で、仕えると決めた主に一生を捧げると決めている

「…いい人だ！この人いい人だ！」

「まあ、故郷のために一人で戦ったり、町人が嫌がったからって言っ  
つて一人で黄巾党を追い払ったりしてたしな」

「あれ？復活したの？…まあいいや。じゃあ徐晃さんを一言で表す  
と？」

「んなもんわかるわけが…（カンペ確認中）…忠犬にする予定らし  
いぞ？」

「へ？犬？徐晃さんって人じゃないの？」

「こんな所で天然發揮すんな！」

…忠犬つてのは簡単に言えば主に尽くすって意味だ」

「へえ〜」

「んじゃ、今回はここまでだな。次からはオリキャラが出るたびに  
あとがきで華音と陥奈のコーナーで紹介するらしい」

「現在質問疑問を募集中だよ」

「じゃあ今回はこの辺で〜」

「またね〜」



帰還し地元民が一人いると楽だよな

黄巾党を退けた翌日、俺と愛紗は穰陽に帰る事にした

…正直、徐晃は欲しい人材だが、町の復興とかが残っている

それにアイツ自身がこの街が好きだ。それを俺の勝手で連れて行くなんてしたくない

…復興も手伝ってやりたいが、優里との約束もあるからな

俺一人の都合でわざわざ誘いに乗ってくれた人を待たせる訳にはいかない

「愛紗、準備はできたか？」

「はい。大丈夫です」

「それじゃ、そろそろ行くぞ。道案内は任せた」

「任せて下さい」

――

「本当に…ありがとうございました」

「……………ました」

街の長老らしき人と徐晃に礼を言われる

何かむず痒いなあ…

「もういいって。俺達は何もやってねえよ。この街を守ったのはお前ら自身だろ？」

「…それでも、姜維がいなかったら、きっと守れなかったから」

「買いかぶりすぎだ。俺はそんな大した人間じゃねえよ」

「…姜維こそ謙遜し過ぎ。もっと遠慮せずにいるべきだと思う」

「そうですぞ。あなた様方のおかげで町人達も戦ってくれたのですから」

「…あんたらも存外頑固だな」

「あなた様程ではありませんよ」

「…同意見」

「「「…はははっ」「」」

ひとしきり笑った後

「まあ、何にせよ…この街はお前らがお前らの意志で勝ち取ったんだ。その事は誇ってもいいんじゃないかねえか？」

「そう…ですな。そうさせて頂きます」

「おっ！そっしとけ！」

「……………？」

話がイマイチわからなかったのか、徐晃が首をコテンと傾げる

「お前らは頑張ったって事だよ」

「…うん。みんな頑張った。姜維たちが助けてくれたから。あのままだったら、私もみんなもここにはいなかった」

「…ったく、俺達は大した事はしてないって言っただろ？」

「…それでも。私達を助けてくれた事に変わりはないから」

「…本当にお前は優しい奴だよ」

「……………／／／」

徐晃の頭を撫でると、顔を真っ赤にして俯く…嫌だったか？

そっ思って手を離すと、何故か残念そうにされた

後長老。その何かムカつくニヤニヤ笑いをやめる

「今回の戦はお前らの手柄…それでいいだろ？」

「…いいの？」

「ああ。人の好意は素直に受け取っておけ」

「…好意？／＼／」

「そう、好意だ」

「ご主人様！準備が整いました〜！」

「お〜！今行く〜！…って事だ。そろそろお別れだな」

「…行っちゃうの？」

「ああ。俺には俺の帰る場所があるからな」

「…また、会える？」

「さあな？そればかりは神さんにでも聞かなきゃわかんねえよ」

「…そう」

「じゃあ、俺は行く。…縁があつたらまた会おうぜ？」

「…うん」

そうして、俺と愛紗は河内を去った

「よろしかったのですか？」

「何がだ？」

「徐晃の事です。あれほどの者を置いておいて良かったのですか？」  
「無理やり連れて行ったり、本人が望んでねえのに引っ張っていくのは論外だ。それじゃあ劉表や曹嵩と変わらねえよ。」

「それに人の人生を左右する事だ。俺がどうこうできる問題じゃねえ。お前を誘った時も最後にはお前が決めて黒狼衆ウチに入ったんだろ？」

「…そうですね。それにしても…ご主人様らしいと言っか…」

「…？」

「普通の義勇軍なら間違いなく河内を治めようと思いますしね」

「ああ、それが。だって河内は月の領地だからな。それに…政務、面倒だろ？」

「言っと思ってましたよ…」

「椿姫よ、良かったのか？」

「…？」

「本当はあの方達と行きたかったのではないか？」

「……………」

「ワシ等の事は気にしなくていい。お前の好きにすれば良いのだぞ」  
「？」

「……………いい。私は…この街が好きだから。みんなを守りたいから」

「…お前がそう言うなら何も言わん。だがな椿姫…そのように自らを殺し続けていれば、いずれ後悔する事になるぞ」

「……………私、は……」

「お前の後悔しない道を選べ。それが最高の親孝行じゃよ」

「…ありがとう。おじいちゃん……」

河内を出て1日が過ぎた

…過ぎたのだが…

「愛紗」

「なんですか？」

「………どっなんだ？」

「どこなんでしょう?」

迷うの…早くね?

「って落ち着いてる場合じゃねえよ!?!どつすんのコレえ!?!」

「ご主人様、落ち着いて下さい。落ち着いて航時機(「タイムマシン」)を探しましょう!」

「いや、お前が落ち着けえ!」

現実的にそんなもんあるわけないだろ!

「さて、こっからどうやって戻るかだが…」

「すみません…私が不甲斐ないばかりに…」

「謝るな。起きた事は仕方がないしな」

「はい…」

というか愛紗が不甲斐ないのなら、どこに行っても迷う俺は何なん  
だか…

「とりあえずは普通の道に戻らねえと…」

「…問題ない。右に真っ直ぐいけば穰陽」

「そうなのか？」

「…うん。前に行った事がある」

「よし！んじゃさっさと帰るか！」

「…ホントにいったよ…」

「…ホラ。言った通り」

「流石だな」

「ありがとうな！」（ナデナデ）

「……………／／／」

さて、と

「で？何で徐晃がここにいるんだ？」 「…ですが今更！？」 「」



集結く水鏡塾…何教えてんだ？

「「「……………」」」

さて、皆さん問題です

久しぶりに我が家に帰ってみると、優里と霞と陥奈と見知らぬ男がいて、男は血の海に沈んでいました

こんな時、俺達はどうなると思いますか？

……………はい、正解はこちらです

「お前達何をしていたんだ!？」

「……………(キュツ)」

「落ち着け、二人共」

愛紗がテンパリ、徐晃が怯え、俺が収集をつける、でした

…「冗談じゃねえよチクシヨ」

「にやわわ!？佳史様!？これは、その、あの、…あつう」

「お？佳史おかえり」

「お帰りなさい、佳史様」

「…とりあえず順にツッコむぞ？  
何でテメエ等全員俺の家にいる？  
んで、その奴は誰だ？

何でソレは血の海に沈んでんだ？

…後優里は落ち着け」

「は、はい…」

「んで？答えは？」

「それは…「始めのは、そろそろ帰って来るといふ知らせを聞いて、佳史様を襲いに来たからで、二つ目は優里が連れて来たので詳しくは知りません。最後は霞と私が来た瞬間に何故かそうになりました」

…うん

「黙ってる変態。霞、実のところはどうなんだ？」

「久しぶりなのにそれは酷くありませんか!？」

「ん…始めのんの後半以外は大体その通りやで？下二つは優里に聞きいちゃ」

「霞まで!？何ですか!？新手のイジメですか!？」

「…優里?」

「聞いてます?私の話」

「…恥ずかしながら、コレがお話した人材です」

「優里！？あなただけは信じていたのに！」

「いや、死んでんだけど」

明らかに人が流す血の量じゃねえよ

「大丈夫です。日常茶飯事ですから」

「いい加減無視は止めませんか？そろそろ拗ねますよ？拗ねちゃいますよ？」

「コレが日常茶飯事って…」

「…私も始めは死んだと思いましたしね…」

後…

「『いい加減ウゼエから黙って拗ねてろ』」

「……………（泣）」

よし、変態は消えた

「じゃあコイツはいつ起きるんだ？」

「もうすぐかと」「…」「…」はどことだ？」

何てお約束な時期に起きる奴だ

「目が覚めたか？」

「ああ…早速で悪いがここはどこだ？優里にシバかれて引きずられた所までは覚えているんだが…」

優里…何してんだお前…

「ここは穰陽の俺の家だ。んで俺は姜維、字は伯約。お前は？」

「ああ、すまん。無礼だったな。俺は司馬伊、字は仲達だ…それはそつと優里…徐庶知らねーか？」

「玲！佳史あま様に無礼な！」

「気にすんな優里。別に俺は偉い訳でもないしな。身分的には同じだぜ？」

「そつだぞ優里。気にしたら負けだ」

「何に負けるのよ…」

きつと考えてもわからないものにしろ

「それは置いといて…優里が様付けしたって事はお前が“天狼”か？」

「そつよ」

優里、何故お前が答える

「そうか…俺の真名は玲だ。これから宜しくな？主上」

「ん？ああ…俺の真名は佳史だ…って！オイ！」

「何だ？何か問題あるのか？」

「問題も何も…ウチでいいのか？こう言っちゃ何だが、義勇軍だぞ？」

当然だが、しっかりした収入もなければ、食料も自給自足だ。待遇で言えば下手な太守に仕えるより悪い

「下手に無能な太守に仕えるよかよっぽどマシだ。それに見た感じ、アンタは義勇軍の長に収まる器じゃなさそうだしな」

ニヤリと笑ってそう言う玲

「わかった…そう言う事ならよろしくな？」

「任せろ」

…ん？待てよ

「そう言えば何で玲は血の海に沈んでたんだ？」

「（ギクッ）」

今明らかに動揺したよなコイツ

「さ、さくて、何の事やら…ワカラナイナア…」

…なんというわかりやすさだ

「はあ…どうせ隠してもその内バレるでしょ？」

「うるせい！俺だって隠したい事くらいあるんだい！」

「子供かお前は」

「…佳史様。玲は」

「ばっ！優里！テメツ！」

「むつつり助平なんです」

はい？

「優里イイイイ！！」

「それなのに初心でして…ちなみにあの血は全部鼻血ですね」

「お前…それは無いわ…」

俺を筆頭に、優里以外の女性陣も玲から距離をとる（女性陣は今まで掃除してました）

「全く…あなたがそんなだから朱里や雛里まであんな趣味に…」

「おのれ優里！人の最高機密を軽々と！」

「で、玲は結局霞の格好（袴にサラシ）と陥奈の見た目（ポーン、キユツ、ボン）を見て発情したと」

「当然だ！」

「オイ優里。コイツ思いつきり公開助平だぞ」

「昔はむつつりだったんですが…進化、いや退化してますね」

「酷っ！」

その後は徐晃の自己紹介と、何故か黒狼衆に入りたいと言い出したので快く迎えた

「…何か扱いがぞんざいな気がする」

「気のせいだ（ナデナデ）」

「…ん / / /」

「俺の扱い酷くねえか…？」

ボン

「…？」

「 ようこそ、こちら（弄られキャラ）の世界へ 」

「 嫌だアアアア！ （泣） 」



偽噂〜反董卓連合と反猿紹連合〜

「椿姫、準備は？」

「…万端。いつでもいける」

「よし、じゃあ同時に行くぞ…参、弐、吉…」

バンッ

「主様（佳史）っ！かく…」…？」

「毎日毎日ご苦労様。けどな…毎日同じ時間に突撃されたら嫌でもわかるんだよ！」

ヒュー…ガン×2（タライが直撃した音）

「まったく、テメエ等はいつになったら大人しくなるんだ」

「（ピー）たら」「

「放送できねーような事言ってるじゃねえ！」

ちなみに今は佳史の部屋で、愛紗と椿姫は正座している

「ふう…とりあえず…優里ー！」

タタタタタ…

「呼びましたか？」

「おう。椿姫：はまだ初犯だから勘弁してやるとして…愛紗を“あの部屋”に連行してくれ」

「え」

「わかりました」

顔が固まる程冷や汗を流す愛紗と、反対に物凄い“イイ笑顔”で返事をして愛紗を引きずり始める優里

「ちょっと待ってくれ優里！後生だ！頼むから助けてくれ！」

「ダメよ ちょっととは私達の苦しみを味わいなさい」

「嫌だアアアアアア！！」

そして抵抗虚しく、愛紗は連れて行かれた…

「…佳史、愛紗どこに連れて行かれたの？」

「政務室」

「…愛紗嫌がってたよ？」

「まあ、量が量だしなあ…」

「…どれくらい？」

「部屋がまるまる一室埋まる」

「……………(汗)」

心底助かったという表情を浮かべる椿姫

お察しの読者もいるかも知んねーが、数日前に穰陽の民が反乱を起  
こした

それによって劉表は江夏に移り、領地が江陵と合わせて2つになった

その後朝廷から新しい太守が来たのだが、すぐに俺に無理やり太守  
を継がせて隠居しやがった

継いでしまったものは仕方ないので、ざっと政務の確認をしたら…  
ヤバいくらいあった

あの女狐…何してやがったんだ…

「あん？書状？」

「そつや。何でも大至急らしいで？」

使者の応対をしたらしい霞が報告する

「どっからだ？」

「え〜と…冀州の猿紹と陳留の曹操やな」

「よし。猿紹のほうは“だが断る”で。」

「ちょ！？一応外交ですよ！？」

「いいんだよ。馬鹿なんだから」

どうせ力貸せとか従えとかだろうし

「せやな。んじゃ華音頼むな？」

「はいはい」

シユタツと言う音がするくらい素早く待たせている使者の所に向かう華音

あれでなかなか交渉上手だから何とかなるだろ

「残りは曹操か…内容は？」

「ん〜：“反董卓連合を組むので力を貸して欲しい。応じるならば白馬まで軍を率いて来られたし。報酬は言い値でよい”…って反董卓連合！？こんな無理やりな連合に応じるヤツおるわけないやろ！」

霞が慌てる

「やっぱりな…」

「来るとは思っていました…まさかこんな早くに来るとは…」

「「え？」」

俺の呟きに愛紗が同意し、霞と陷奈は予想外だったのか、声が裏返った

「二人共知らぬのか？今大陸中に流れている噂を」

「噂？」

「何かあつたか？」

「董卓が悪政をはたらき、皇帝を傀儡にしている”って噂だ。全くの嘘だがな」

月が悪政をするなんざありえない

念のために華音に調べてもらったから間違いないだろう

「二人共知つとつて放つて置いたんか…？」

霞が義の通つてない事は許さないとばかりに俺と愛紗を睨む

「アホか。きつちり手は回したよ…ただあと一手欲しい所だがな」

雪蓮達には既に手は回した

劉備達を誘いたい所だが…既に曹操達に忖じてしまっているだろう

…しょうがない。馬騰の姐さんに頼むか

「まあ何にせよ反董卓連合に応じるつもりはねえ。月達には恩がある。だからって訳でもねえが…絶対に守り抜く！」

俺がそう言つと…

「よう言つた！それでこそ佳史や！」

「仕方ないですね。お供しますよ。佳史様」

「主様の望みならば、この関雲長、敵総大将の首を献上して見せます！」

「隠密なら任せて」

この場にいる全員が同調してくれた

…さて、反董卓連合の野郎共

テメエ等が俺の大事なもんに手エ出すつてんなら…叩っ斬るまでだ

一人として失わねえ…今度は…全部守つてみせる

大戦〜開戦直前〜（前書き）

あとがきに玲の設定載せました

## 大戦〜開戦直前〜

「…って訳だ。下手するとすぐに猿（猿紹）が連合連れて攻めて来るぞ？」

「そんなあつさりヤバい事言わないでよ!!!」

「へう〜…」

はい、へう〜いただきました〜

今は見てわかる通り、兵を連れて月達を助けに来たんだが…まだ連合の存在を知らなかったようなので説明している

「…でも大体事情はわかったわ。でもいいの？要は大陸中の勢力対私達よ？」

「いいんだよ。月には恩もあるし、何より良いヤツだしな。それにある程度は手も打ったし」

「へう…良い人だなんて…」

「手？何か策でもあるの？」

「策って程じゃねえが、とりあえず孫策と馬騰と張魯は連合には参加しない」

本当なら味方になって欲しい所だったが、雪蓮は今は猿術の客将だし、姐さんは西に手一杯みたいだから無理。張魯のおっさんは元々



月と仲が良いからな

「…本当にアンタって規格外ね…」

「いや〜それ程でも〜」

「……………（皮肉が通じない…）」

そんな風に詠が敗北感を味わっていると…

シュタツ

「お兄イ〜話ついたよ〜」

「へうつ!?!?」

「ひゃつ!?!?」

「そうか。どうだった」

「うん。流石に軍は出せないけど翠ちゃんくらいは預けるって。後月ちゃん詠ちゃん久しぶり〜」

突然現れて普通に話し出す華音

びっくりしないのかって?慣れって凄いんだぜ?

「かかかか華音!アンタいつ入って来たの!?!?」

「ついさっきだよ?」

「…気配すら無いってどうなのよ」

「あゝ…なんつーか、悪い」 華音に隠密術教えた人

…まさかここまで適性があるなんて思わなかったんです…

それはそうと…

「月がびっくりしすぎて処理落ちしてるが？」

「…月げつっ！？」

「いや、遅くね？」

「…と、そんな会話してた時期もありましたな」

「何を急に老けているんですか…」

あれから結構飛んで、今はシ水関。

ちなみに将は函谷関に優里、華雄、陳宮

シ水関に俺、愛紗、霞、玲、椿姫、恋

洛陽に総大将の月と詠

伝令と遊軍に華音

穰陽の留守番に陥奈という配置だ

…留守番決めはくじ引きだったりする

「それにしても、函谷関を優里と華雄に任せて良かったのですか？」

「ああ。華雄ならまず間違いなく優里をキレさせるからな」

「優里がキレればこっちの勝ちだ」

「あゝ…せやな。出来たらキレンといて欲しいけどな」

「」「」？？？」「」

「」「その内わかるから気にすんな」「」

「それはそうと…佳史、この大軍相手にするんだ。何か策はあるんだろ？」

「当たり前だろ？」

「それでどんな策だ？俺の考えと照らし合わせて詰めたいんだが」

「んゝ…色々説明は面倒くさいが…簡単に言っなら…」

シ水関は一旦捨てる

『……………』

「？どした？みんなして固まって」

『はああああああ！！！！？』

俺の耳を貫いたのは、全員（恋以外）の大合唱だった

…耳痛エ…

大戦〜開戦直前〜（後書き）

華「はい！という訳で水鏡塾の新メンバーは司馬イこと玲くんでした〜！」

陥「留守番…留守番…（ズズーン）」

華「陥奈さんは処理落ちしてますけど、どんどん行きますよ〜。まずは玲くんのプロフィール〜！」

司馬イ 仲達 玲

武器：鉄扇

容姿…赤茶色の髪で短髪。それを思いつきり逆立てている。顔は文句のないほどイケメン

水鏡塾を卒業した唯一の男。司馬徽（水鏡さん）の甥

見た目は文句無しのイケメンだが、中身は真性のムツツリスケベ

だが、知識は人一倍あるくせに初心で、すぐに鼻血を噴く（給料の半分がこの時の輸血に消えるほど）

優里が朱里の政治の師匠ならば、玲は雛里の軍略の師匠である。そ

の軍略知識は他の追隨を許さない。朱里、雛里は勿論、冥琳や桂花、稟、風をも圧倒する

佳史の親友兼悪友。佳史が政務を抜け出す時は大抵一緒に逃げ出している

優里の幼なじみだが、力関係が明らかなたため、頭が上がらない

武力についてはゴミだが、柔術だけは達人レベル

華「こんなもんかな？じゃあ文字数も残り少ないから今回はここま  
で！感想、質問待ってまゝす」

陥「…私の出番は…」

華「少なくとも連合編が終わるまでは無いよ」

陥「馬鹿なっ!?!」

大戦の戦場を喰らうは黒き群狼

「シ水関を捨てるだあ！？何考えてんだお前は！」

「そうですねよ主様！今回はかりは見逃せません！」

俺の言葉を聞いた瞬間、がっつり噛みついてくる玲と愛紗

「あゝ！うるせー！月と詠にゃ了解取ってただからいいだろーが！  
後場所考えろ！もう連合が集まって来てんだぞ！」

「あ、すまん」

「す、すみません。取り乱しました……」

冗談でもハツタリでもなく、連合軍は既に集結している

総大将決めでゴチャゴチャしてるらしいが、どうせあのダ名族で落ち着くだろ

「ほら、とりあえずさっさと籠城戦の準備済ましちまうぞ」

『はい』

（一刀side）

「どうしよう……先鋒任されちゃった……」

『……………はあ!?!』

あ、やっぱりそう来るよね?

「そんな事をしたら我らはすぐに壊滅してしまうぞ!?!」

「その前に兵隊さんの士気が下がるのだ!」

「すみません…私がついていながら…」

とてつもなく空気が重い…効果音をつけるなら『どよ〜ん』だ

…でもなあ…史実だと連合軍が意外とあっさり勝つんだよな…

「みんな、大丈夫だよ。相手だつて董卓だけなんだから?いくら飛將軍の呂布がいるとはいえこつちにはあの曹操もいるんだし、猿紹に兵を借りるのにも成功したんだ。きつと勝てる!」

そう思つた事をそのまま言つ

「董卓さん一人?違いますよご主人様。相手は…あの黒狼衆です」

「え?嘘!?!」

「黒狼衆だと!?!あの最強の義勇軍と名高い黒狼衆がか!?!」

「黒狼衆?」

聞き覚えのない名前だったので、一番驚いていた星に尋ねる



「主よ…流石に黒狼衆くらいは知っていて下され…」

「ご主人様知らないの！？ちょっと前に劉表さんに代わって穰陽の太守になっただよ？」

「というかお兄ちゃんとお姉ちゃんと鈴々は黒狼衆の筆頭さんに会った事があるのだ。もう忘れちゃったのー？」

「え？そんな人と会った事あるっけ？」

「黒狼衆の筆頭さんは姜維さんだよ？」

「へ…？」

姜維。史実なら、シヨク漢最後の忠臣。諸葛亮の後継者として北伐を決行するが、味方に恵まれずに魏に敗北してしまい、クーデターを密告されて処刑された

だが、この世界では、劉備…桃香達とほぼ同年代で、数少ない男の将。始めて会った時の衝撃も大きかったからよく覚えている

しかも、本来なら劉備軍にいるはずの関羽が姜維の部下だったし

「“天狼”と名高い姜維を筆頭に、将に関羽、張遼、高順、徐晃、太史慈。軍師には徐庶に司馬伊。兵の練度は高く、姜維自身が凄まじい武を持つ…」

「“彼軍当群狼如也”…先生ですらそう日記に記していました…」

朱里と雛里が真剣な顔でそう告げる

「しかも…ゆ 徐庶姉と司馬伊兄は私達の先輩で、先生なんです」

「あ 司馬伊兄さんは私に軍略を、徐庶姉は朱里ちゃんに政治を教えてくださいましたんです…」

徐庶に司馬伊…確かに二人共歴史に残るほどの名将だ

でも、伏龍鳳雛には劣るはず…

「ちなみに私は一度も司馬伊兄き軍略用の軍戯（将棋みたいなもの）で勝った事ありません…」

「私は徐庶姉には勝った事がありますが…三十回やって一回勝てるかどうかです…」

嘘だろ…頼みの綱の頭脳戦まで…

「なので、ここは一旦、猿紹さんと猿術さんに助力を願おうと思います」

「ふえ？曹操さんじゃないの？」

「今曹操さんに助力を願っても向こうには見返りがありません。なので中八九断られます。その点、あの二人ならおだてれば大抵の事は認めてもらえるでしょう」

「具体的には何をさせるのだ？」

「猿術さんと猿紹さんに左右翼を担当して貰います。二人が相手に

躍起になっている間に私達は兵を一旦引き、左右に敵戦力が集中した所で中央を突破します」

「よし！それでいこう！朱里と雛里ならきつと兄弟弟子に勝てるさ  
！」

…その時は、まさかあんな結果になるなんて、想像もしていなかった

（side out）

「…来たな」

目の前には色とりどりの鎧を纏った無数の兵

「華音、先鋒は？」

「中央が劉備。左翼が猿紹で右翼が猿術だよ」

「だそうだぞ佳史。どうすんだ？」

玲の言葉に、目を閉じて思考に没頭する

「……………華音。お前は一旦洛陽に戻って月と詠の護衛だ。嫌な予感がする」

「お兄イの勘は悪い時だけ当たるからね…わかったよ」

「玲はここで前線指揮を頼む」

「任せる！」

…霞。お前は左翼、恋は右翼。愛紗と椿姫は俺と中央だ」

一見大軍に少人数を当てたムチャクチャな割り当てに見えるが、両翼の大將は無能で将も平凡だ

…あの二人なら速攻で蹴散らせるだろう

真に問題なのは劉備軍だ。

弱小勢力ながら、將は充実し、軍師は優里と玲の妹分。問題だった兵の数は猿紹をのせた事で解消した

もはや今回、曹操と並ぶ最大の障害と化している

…でも、それでも

負けられない。負ける訳にはいかない

“アイツ”と交わした、もう二度と破らないと誓った約束があるから

…もう二度と、失いたくはないから

「テメエ等全員、俺の後ろについて来い！決して遅れるな！俺を、黒狼の旗を見失うな！」

全部…護ってみせる

「行くぞ…黒狼の名と魂！奴らに刻み込んでやれ！

全軍、出陣ぞ！…！」

『おおおおおおおおお！…！…！』

戦が、始まる

大戦〱知謀魅せし者達〱

〱一刀side〱

「伝令！敵軍勢、シ水関から打って出ました！」

『なっ！？』

あまりに予想外の事に全員が声を上げた

何でだ？何でシ水関という絶対有利な拠点を活かさずに野戦なんて半ば博打みたいな手を取ったんだ…？

「やられました…」

色々と考えをめぐらせていると、不意に雛里がそう呟いた

「雛里ちゃん？どついつ事？」

「…今回の相手が黒狼衆だったからだよ」

「ああ！」

「そついつ事か…！」

「どついつ事なんだ？」

朱里や星はわかったみたいだけど、俺には一向にわからないので、見栄をはずらずに聞いてみる

「黒狼衆はその戦ぶりから最強の義勇軍と呼ばれてるんです。あの黄巾党の被害が凄まじかった荊州で、黒狼衆が滞在していた穰陽は一切被害が無かったらしいですから」

「でもそれが今回の事とどう関係あるんだ？」

「黒狼衆は全ての戦を街に被害を与えないで勝利しているんです。つまり、一度も市街地戦に追い込まれる事なく野戦で勝利しているんです」

「そしてその為の原動力となったのは、騎兵。つまり、黒狼衆の最強たる所以はその騎馬技術の高さです」

「でも、騎馬技術ならこつちにも公孫讚がいるじゃないか」

確か公孫讚には白馬義従という騎馬隊がいたはずだ

「いえ、無駄です」

「えっ？」

「向こうには司馬イ兄がいますから…」

「司馬イ兄なら白馬義従を見た瞬間に対抗策を導き出します…」

正直信じられなかった。白馬義従は正史で猿紹が弱小勢力の公孫讚に手こずる原因となった技術だ

そんな技術が簡単に打ち破られるなんて…

「伝令！我が軍に向かってくる旗は姜、関、徐の3つです！」

「わかりました！鈴々ちゃんに1当てした後、すぐに後退するように伝えて下さい！」

「星さんも、鈴々ちゃんの援護をお願いします」

「心得た」

戦が淡々と進む

手が出せない。仲間が死地に行くのをただ見守るしか出来ない自分に、大した策も出せない自分に、無性に腹が立った

〈side out〉

〈side 玲〉

「張遼將軍と呂布將軍に伝令だ！“一つの勢力だけを追い込むな、面で押すように攻めよ”と！」

「はっ！」

打って出た瞬間、猿家の馬鹿二人は自分達に被害が出るのを嫌がったのか、やたら多い諸侯を代わりに前線に立てた

「普通なら相手に策士がいるって思っただがなあ……」



猿家の軍師は過保護と流されやすい苦勞人。懸念なのは曹操の入れ知恵だが、彼女の性格から考えて、今はそれはない

そんな事を考えながら戦場を見渡せる場所まで行く

パツと見ると、左右翼は伝令通りに徐々に、だが確実に諸侯の軍を押し込んでいる

「さて…後は合図を間違えないようにしないと…」

〈side out〉

…おかしい

劉備軍に全く勢いが無い

…それどころか、一当てするなり、すぐに後退しだした

「何だこのいかにも策がありますみたいなき退き方は…」

「流石にこんなあからさまだと私にもわかりますよ」

「…でも、太守になってすぐの戦だから。仕方ないといえば仕方ない」

愛紗は呆れ、椿姫も期待はずれだと言わんばかりにため息を吐く

「まあいいか。何か策があるのは明らかだし、こっちはこれで決まなきゃいけない理由もねえ。愛紗は霞に、椿姫は恋に加勢して来い。」

玲の合図があり次第撤退だ」

「はい！」

「…わかった」

返事をするなり、すぐに自分達の隊を引き連れて、移動する二人

「さて、俺らもシ水関前まで退くぞ！」

『はっ！』

「（さて…そろそろ向こうは決着が着いた頃か…？）」

「はあ…」

優里は一人、関の上でため息をついていた

何故なら…

「何故この私が亀のように関に閉じこもっていなければならんだ  
」！

「だから必要ありません。馬超さんが合流次第殲滅戦になりますか  
」ら

「策があると言っているのがわからないのですか！」

案の定どごその猪が打って出るとか言い出したからだ

「あのような凡庸な将など我が武の前では無も同然！」

「武がなくても知があつたらどうするのです！」

「それごと叩き潰す！」

「無理なのです！そして必要無いのです！」

「知るか！さつさと打って出させる！」

尚も暴れる華雄に必死で押さえる陳宮

「あーもう！徐庶殿も何か言っ…て…？」

「…？どうしたのだ陳…きゅ…う…？」

途中から何も話さなくなった優里を訝しんだ陳宮が優里の方を向くが、尻すぼみに声が小さくなっていく

更にそれを怪しく思った華雄も同じようになる

そしてその優里は…

俯いていて、その表情はわからないが、くつくつと笑っており、背後からは黒いオーラが具現化して、般若の形をとっている…ように見えた

「あの…徐庶殿？いや、徐庶様？」

「ど、どうしたのだ徐庶？いや、徐庶殿下様？」

怖さのあまりか、無駄に丁寧な言葉使いになる二人

それほど、今の優里は怖かった

「華雄…」

「は、はい！」

「私さつきから策があると言っていますよね…？何故それを聞かないんですか…？」

「い、いや…我が武を「あ」？」「何でも無いですハイ！」

「なら…大人しく従えや。脳筋猪が」

底冷えがするように冷たい優里の声に、華雄は罵倒されている事すら忘れて震えていた…

その後、馬超と共に連合軍を袋叩きにして撃退した

その時の華雄は犬よりも従順だったという

後に華雄はこう語った

「…恋と姜維と関羽を同時に真剣で鍛錬する方が千倍マシだった」と

## 大戦〱夕名家の進軍〱

〱side 華琳〱

「してやられたわね…」

「策、將の割り振り、仕掛ける時期…全てにおいて流石と言わざるを得ません…」

私の呟きを拾ったのか、桂花が自分の考察を言う

「…桂花？もしあなたがあの姜維の立場だとして、あの策を思いついたかしら？」

「…いえ、無理です。私では思いついたとしても困んで退路を与えながら確実に敵を減らすのを繰り返すくらいです。それにそもそも姜維のあの策は自分を囷にして時間を稼がないと無意味ですから…」

…あの男嫌いの桂花にここまで言わせるなんて…

そんな会話をする私達の前の連合軍の兵は、戦死者こそ少ないが、全員何かしらの骨折をしていた

…全く。本当に面白いわね

見てなさい、姜維。やられっぱなしは趣味じゃないのよ

〱side out〱

「さて、全員無事か？」

「ウチの隊は無事や」

「私ものです」

「…私も。大丈夫」

黒狼は無事だな。

「…ちよつとだけ減った。でも問題ない」

「そうか…よし！このまま夜まで待つて虎牢関まで退くぞ！」

俺がそう言つと、すぐに返事が返ってくる

「殿は俺の隊で虎牢関側の出口で待つてろ。椿姫と恋は先に行つて籠城の準備をしといてくれ」

「…ん」

「…了解」

そんで…ん？

「どつした愛紗？」

「落ち着け私…主様は馬鹿で子供だから仕方ない…主様は馬鹿で子供だから仕方ない…」

「酷っ！？俺仮にも筆頭だよな！？」

「あゝ…むしろ佳史が筆頭やからや。普通大将が最前線に出て戦わんやろ？それになんか佳史ばかり厳しい所で戦うから不満なんぢやうか？」

「ええ…何その理不尽」

そんなに戦いたいなら言ってくれりゃいいのに

「あゝ…愛紗？」

「馬鹿で子供馬鹿で子ど…どうしました？」

…最近愛紗が壊れてきてる気がする

元の愛紗！頼むから戻って来い！

「次は最前線に出してやるから機嫌直せ。な？」

「……………」

あれ？空気が重くなつたぞ？

霞が「あゝあ、ウチ知らんで」とか言って哀れみの目で見て来てるし

「……………様の……………」



「ん？何か言ったか？」

「主様の…馬鹿ああああ！！！」

「ふべっ！？」

愛紗の全力の拳が俺の鳩尾にもろに入った

「わかってましたけど、今日こそは言わせて貰います！この鈍感甲斐性なしダメ男！」

「今回も佳史が悪いで？いい加減受け入れえやこの鈍感甲斐性なしダメ男…なんか言うてて腹立って来たわ」

「鈍感って何が！？つかいくら何でもそこまで言うか！？」

「…つるさい！！！」

「ほがっ！？」

…へへっ…いい拳…持ってんじゃ…ねえ…か…（バタッ）

「……様、主様！」

……つるせーな…まだ眠いんだよ…

「後二年…「待てるかつ！」…ですよね」

愛紗の声に渋々起き上がって見ると、知らない天井が…思いつきり知ってる天井だ

「そういえばシ水関にいたんだっけ…って今何時だ？」

「子一刻（午前1時くらい）です。言われていた準備は全て終わったので後は退くだけですよ」

「マジか。…じゃあいつまでもここにいても仕方ないしさっさと行くか」

「はい」

「わかったわ」

そうやって俺達はシ水関を後にした

〈side 猿紹〉

「おゝほっほっほ！さあ、華麗に雄々しく前進ですわよ！」

私達は今、他軍に先駆けてシ水関に向かっていきますわ！

「姫…本当に行くんですか？」

「何を言っているんですの！私は総大将ですよ！？何をしようが私の勝手ですわ！」

「でも麗羽様…相手はあの“天狼”ですよ？何かあるかわかりま

せんよ〜…」

「ふん!“天狼”なんて我が名門猿家の威光の前では霞んで見えませわ!」

「そういう問題じゃないですつてば〜!」

「しつこいですわよ斗詩さん!せっかく『シ水関から黒狼衆が撤退した』と言う情報が手に入ったんですから」

そう、今回の策（普通の進軍）の裏には、旅の商人が「なんか黒狼衆が撤退したらしいですよ〜?今なら無傷で関を落とせるかも知れませんね〜」と情報を提供してくれたのが発端です

こんな時にこんな情報が手に入るなんて…全ては私の仁徳のなせる技ですわ!

「さあ!早く!あのクルクル小娘に一泡吹かせてやりますわよ!」

「…はあ」「」

お〜ほっほっほ!あの小娘の悔しがる顔が目に見えますわ!

〜side out〜

## 大戦〱馬鹿と霸王と仁徳と〱

〱side華琳〱

「伝令！猿紹殿がシ水関に兵を寄せている模様！」

「なんですって!?!」

初戦を飾れず、翌日からまた仕切り直そうとしていた時に、そんな知らせが入って来た

「馬鹿な…あの猿紹がわざわざ自兵を捨てるような真似をするはずが…」

「いや、桂花。今回の敗戦で癩癩を起こしたと言う可能性も…」

秋蘭と桂花が各々の意見を言う

「秋蘭。今回は桂花の意見が正しいと思うわ。あれは馬鹿だけど、だからといって自分に損な事は絶対にしない」

…しかし、ならばどうして進軍なんてしているのかしら

まさか、黒狼衆に勝てる要素を見つけた…?いや、そもそも麗羽の軍の質では…

ドゴオオオオオオン!!!

私の思考は、シ水関から聞こえてきた物凄い音にかき消された

side out

「一刀side」

シ水関の初戦は、連合軍の大敗に終わった

…どうやら俺の知識は、この世界だとあまり役に立たないみたいだ  
シ水関の敗戦、黒狼衆の存在、既に孫堅が死んでいる事、連合の時  
点で諸葛亮が劉備陣営にいること…

イレギュラーが多すぎる

そんな事を考えて、とりあえずは明日に備えて寝ようとした時…

「伝令！猿紹殿がシ水関に兵を進軍させているようです！」

「…はあ!?!」

「……って事なんだけど…」

「「アホ（だな/ですな）」

「無謀としか言えませんね…」

「あわわ…」

「わかってたけど容赦ないな。特に星と満<sup>みつる</sup>」

星と満（簡擁）は猿紹を堂々とアホ扱いし、朱里はバツサリ、雛里も動揺はしているが否定はしない。

「どうもシ水関がもぬけの空だったみたいだが…「え！？じゃあ私達も急がないと！」ちよつとは落ち着いて話を聞け！」

「ふみゆ！？」

満が桃香の天然ボケを潰す

「…まあ、十中八九間違いないく畏ですね」

「だろうな。だからこそアホの総大将サマに生け贄になってもらおうじゃねえか」

満がそう言い終えた直後

ドゴオオオオオオン！！！！

耳をつんざく轟音が、シ水関から聞こえてきた

side out

「あらら。まさかこんなに思い通りにいくなんてね」

「まあ、アホで有名な猿紹だからな。予想通りっていやあ、予想通りだ」

俺と華音、玲は今シ水関のすぐ側の高台で、門が全壊した（……）  
……シ水関を見ている

「しっかしまあ……佳史もえげつない策考えたなあ。開門した瞬間に門の側に積んで置いた瓦礫を火薬で爆散させるなんてな」

「正直成功するかどうかは半々だったがな……とりあえず、これで最高兵力を誇っていた猿紹の軍は半壊。劉備、猿術の軍は大打撃を受けている。無事なのはまだ前線に出ていない曹操と晋陽の太守……」

……張燕

初めて見た時に俺ですら少し圧倒された男

このまま死ぬ事はないとは思ったが、まさか賊から太守にまでなるとはな……

まあいい。奴がでたら俺が出る

さあ……踊れ。俺の手の上でな……

大戦〱本領発揮〱（前書き）

テスト前：いやさ、テスト中投稿！

一刀君がやたら賢くなっております



## 大戦へ本領発揮へ

「一刀side」

『……………』

空気が、重い

猿紹の独断先行は結果的にシ水関を占拠するという結果は得た

しかし、代償が大きすぎる。連合の約四割を占めていた猿紹の兵は半壊し、実質的に連合自体が半壊してしまった

「…なあ、もうこれ以上は無理じゃないか？一旦連合を解散させて…」

「何を言い出すんですの公孫讚さん！洛陽を落とすまでは戻れませんわ！」

「でも…もう連合の規模なんて始めの半分以下じゃないか。これ以上続けても結果は見えてる」

「黙りなさい！…そんなに帰りたければ帰って頂いて結構ですわ！」

オイオイ、総大将から好きにしる宣言が出たよ

「そう。なら私達は好きにさせてもらおうわ」

「な！？華琳さん！？あなたは許しませんわよ！まだ全く戦ってます

らないではないですか！」

「別に抜けるなんて言っていないわよ。私達は私達の好きにさせてもらうだけ。それなら問題ないでしょう？」

…確かに、それも有効手段か…？

「朱里？」

「はい。私も有効だと思えます」

「そうか…猿紹さん！」

「なんですの！？今忙しいので後にしてくれませんか！？」

あらら…癩癩起こしちゃって

「別にいいんじゃないか？」

「…あなた、いつから総大将であるこの私に意見できる身分になりましたの？」

「やだな～意見じゃなくて進言ですよ」（棒読み）

誰がいつお前の指示に従うって言ったよ

「…仕方ありませんわ。わかりました。許可しますわ」

「…賢明な判断、感謝するわ」

許可されるとすぐに天幕を出て行く曹操

「…貸し、一つな」ボソッ

「…いずれ返すわよ」

…さて、明日から大変だな

また前線だろうなあ…

sideend

「さて…これでは奴らを追い返すだけだ」

俺がそう言つと、その場にいた四人娘が反応する

…わかりやすっ

「…と、言ひつとほ」

「…思いつきり」

「やってしまつて」

「ええんやな」

ニヤッ × 4

…見た感じ凄く綺麗 & 可愛い笑顔だが、言ってる事はこの上なく物騒ですね、ハイ

「…勿論だ！」ニヤッ

でもそんなノリが俺は大好きです

その後、兵を集めて虎牢関の門の前に陣取った

「そろそろお前らもイライラが溜まってきた頃だろ？…ならやることは一つだ。真つ正面から連合を叩き潰す！」

『おおおおおお！』

「数の差がなんだ？小は大に勝てねえなんざ誰が決めた？決まってるねえだろ！！なら、俺達の選択肢はなんだ？奴らを叩き潰す事だ！」

そこまで言つて、一度兵を見渡す

誰一人として視線を逸らす奴はいない

「示してやろうぜ？俺達の武を。知を。大陸中に俺達の名を轟かせる！」

『うおおおおおお！…！』

「行くぞ！」

『しゃあああああ！…！』

「佳史と愛紗は中央、霞は左翼、恋は右翼！椿姫は遊撃隊として先ずは中央だ！」

開戦と同時に玲の指示が飛ぶ

…指示は玲に任せておけば心配ない

さあ…覚悟を決めるよ？阿呆の総大将サマよお

「伝令！黒狼衆、虎牢関から打って出ました！」

「朱里！雛里！」

「わかってます！鈴々ちゃんと星さん、満さんは正面から！雛里ちゃんの本陣で指揮を！私も作戦通りに出ます！」

『なのだ了解っ！！』

「みんな！守備は考えるな！攻撃こそ最大の防御だ！」

『おおおおお！！』

ザシユ！

「…ふう、キリがねえな」

「金の鎧と緑の鎧…猿紹軍と劉備軍の混合ですね」

開戦から約二刻

今は愛紗と椿姫と中央で戦っている

「佳史、恋が止められてる」

「ん？…ああ…椿姫、手伝ってやってくれ」

ちなみにこの会話中一度も手も足も止めてません

「…わかった。行ってくる」

「愛紗も霞を助けてやってくれ」

「しかし…それでは主様が…」

「俺なら大丈夫だ」

「…わかりました！」

しびしびながら俺の命令を聞いてくれる愛紗

…つたく、俺には勿体無い仲間達だよ

「あ！見つけたのだ！」

「ん？おお、いつかのチビッ」

「チビッコじゃないのだ！鈴々は張飛なのだ！」

「悪い悪い。で？何の用だチビッコ？」

「むきーっ！なのだ！！」

どこかで見たとようなやり取りをする俺達

「鈴々、この御仁がそうなのか？」

「案外ヒョロいんだな」

そしてチビッコの後ろから二人の男女が出て来た

「…本当に何の用だよ」

「見てわからないか？お前を止めに来た」

「卑怯だとはわかつてはいるが…主の頼みだ。わかってくれ」

二人ともすぐに槍を構える

「別に卑怯なんざ思わねーよ。これは戦だからな」

「…それは助かるな」

「では…趙子龍、参る！」

「燕人張飛の丈八蛇矛、受けてみるのだ！」

宣言と同時に趙雲と張飛が突っ込んで来る

…が、甘い

「らあっ！！」

ガギイイイン！

「「なっ！？」」

「趙雲は早いが軽い。張飛は重いが遅い。そんなんで俺を殺ろうな  
んざ十年早エ！」

そう言いながら振り向くと同時に戟を振り抜く

確かな手応えと共に簡擁が吹き飛んでいった

「満（お兄ちゃん）！？」

…一応峰打ちだから死んではない…はず

「まず一人」

「くっ…ハアア！」

趙雲が再び連撃を打ち込んでくるが、そのことごとくを打ち返す



「どうした！？こんなもんか！！」

「ぐっ！」

趙雲を弾き返して上を見ると、蛇矛を振り上げた張飛が宙に舞っていた

それに迎撃しようと俺は構え

「今です！捕らえて下さい！」

「「「なっ！？」「」」

声とほぼ同時に俺は網にかかり、さらに網が絡まって動けなくなる

そして…

ドゴォー！

「がっ！？……」

頭に物凄い衝撃を受けて、俺は意識を失った

…悪イ、昏…

大戦〱捕縛、そして…〱（前書き）

久々投稿です！

遅くなつてすみませんでした！

大戦（捕縛、そして…）

（side玲）

「で、伝令です！姜維様が敵軍に捕縛されました！」

「なんだと！」

俺はその情報を聞くと、まずは偽報かと疑った。が、そんな信憑性の薄い偽報があるのか…？

「詳しく話せ！」

「は！姜維様が劉備軍の将三人と三対一で戦っている最中、猿紹軍の猿紹、顔良、文醜が投網を用いて姜維様を捕縛、運悪く攻撃体制に入っていた劉備軍の張飛の一撃を受けて捕縛されたようです！」

…なるほど。一騎打ち紛いの最中に横槍を入られたのか

まあ、常識があればそんな事は絶対にしないんだがな…流石は稀代の糞だ

「…合図を出せ。将を全員呼び戻すぞ」

「は。撤退するのですか…？」

その兵の顔は、汚い真似で俺達の長を捕らえられたと言つ怒りで一杯だった

佳史が『冷静さを失うな。常に一步引いて物事を見る』と言い聞かせてなければ黒狼衆が全員で猿紹に突っ込んで行ったかもしれない

「…じゃあ、逆に聞くが…お前はそのまま終わっていいのか？」

「もし撤退すると仰るならば、私一人でも敵陣に切り込ませて頂きます」

即答。

…多分この軍なら将を含めて全員同じ答えだろう

勿論俺を含めて

「よく言った！そんな真似されて撤退するなんかできるか！…軍議だ。目には目を、歯には歯を…佳史を救い出して堂々と奴らを蹴散らすぞ！」

「はい！」

…今回ばかりは俺もキレた

俺の…この司馬仲達の培ってきた軍略…余す事なく堪能させてやる

…！

side out

雨が、降っている

周りには、俺と同じ鎧を付けた兵と、別の鎧を付けた兵の無数の屍が転がっている

立っているのは、俺一人

そして俺の目の前には…

キイイイイン…

妙な耳鳴りの後、突然景色が入れ替わった。

どこかの屋敷の中庭に、何をするでもなく立っていた

誰かの葬儀のようで、俺を覗く全員が棺の前に立ち、泣いたり、話し掛けたりしている

ドウシテ…

ドウシテ ガシندانダ

ドウシテアノケガラワシイオニガイキテイルンダ

ドウシテ…ドウシテ！

そんな声が聞こえてきたと思うと、何故かさっきまで棺の周りにいた人達に囲まれていた

ドウシテオマエガイキテイル

ドウシテアノヒトガシナナケレバイケナカッタんだ

オマエノセイデ、アノヒトノシアワセハウバワレタんだ

「…やめろ」

俺を囲む人の内の一人が俺に近づき、胸ぐらをつかむ

ムスメヲ、カエセ

「止めてくれ…」

ナゼオマエヲスクツタムスメガシナナケレバナラナイ

「止める…！」

オマエナンカガアノコノソバニイタカラ…！

「止める…！！」

オマエガシネバヨカッタノニ！

オマエガ！オウカラ！コロシタんだ！！

「もう止めてくれエエエエエエ!!!」

俺の中で、ナニカがコワレた

「…ここは…?」

俺は一体何を…

「あら、目が覚めましたの?」

「ッ!」

突然聞き覚えのある声が聞こえて、俺は反射的にその場を飛び退く  
武器に手をやろうとしたが、黒天覇狼は勿論、刀までなく、腕は縛られていた

…そついや、捕まったんだつたな。俺

「…この卑怯者が」

「おゝほっほっほ!今のあなたに何を言われても毛ほども効きませんわ!」

そんな中身のない会話をしながら、周囲を確認する

…猿紹を除けば親衛隊は約五十、恐らくこの糞の性格からして、外

にまだ百はいるはず。俺の武器は…天幕の端にまとめて置いてある。走って取りに行くのは恐らく不可能…

「さて…今回はあなたにとっても悪くない話を持って来ましたの」

「…聞くだけ聞いてやるよ」

そう言うと、猿紹は満足げに大きくうなずき、

「我が猿家に従いなさいな。勿論黒狼衆ごと全員。そうすればあなたの命は助けてあげない事もなくてよ？」

…はい、予想通りですね

「悪い話では無いでしょう？私に従えば助けると言っているのだから、あまり俺を見くびるなよ」…なんですって？

「当たり前だろ。誰が好んで汚い真似されて捕まった相手に仕えようと思う？命がかかれば俺は墜ちると思っただか？」

一拍置いて、

「舐めてんじゃねえぞ。そんなクズに成り下がる位なら俺は信念を通して死んでやるよ」

猿紹は暫く惚けていたが、少し経つと、すぐに金切り声を上げて

「よくも好き放題言ってくれましたわね！立場の違いを理解して言っているのですか！？そんなに死にたいのなら望み通りさっさと殺して差し上げますわ！」



猿紹がそう言うと、親衛隊が一斉に斬りかかって来る

…甘いな

シユル…

『!?!?』

俺が自力で縄を解いたのに驚いたのか、一瞬親衛隊の動きが止まる

その隙に近くにいた兵の首を折り、剣を奪って一息で数人を斬り倒す

そして俺の武器に向かって全力で駆ける

数瞬して、漸く我に返った親衛隊が動き出したが…遅い

武器を取り戻し、すぐに装備して、一人残らず斬り殺していく

「っ!?!?皆さん、入ってきなさい!あの化け物を切り捨てなさい!」

その声と共に、さっきの数倍の兵が天幕になだれ込んでくる

…無駄な足掻きだな

俺は思考を捨て、ただ目の前の敵を斬り殺していった

「そ、そんな…」

真っ赤に染まった天幕

妖しく揺らめく篝火

…そして、地に倒れ伏す無数の屍

…その光景に、少し頭が痛くなる

それを抑えて、一歩ずつ猿紹に近づいていく

「ひっ！こ、来ないで下さい！この化け物！」

化け物、ね

言い得て妙だな

「だ、誰か！誰かいませんの！？」

猿紹は無様に天幕を逃げ回っている

そして…

「「姫！！」」

「……………」

「ちっ…」

「…面倒なのだ。帰りたいのだ」

三対一の時の面子と、猿家の二枚看板がギリギリで到着した

「…貴様らか」

「私達だつて望んでその屑を救いに来た訳ではないぞ…」

「ただ、俺達の立場上仕方ねえんだよ」

「全くなのだ…」

劉備軍はすでに士気が無いに等しい…が、俺の知った事ではない

「斗詩さん！猪々子さん！ちょうどいいですわ！その化け物をや  
つてしまいなさい！」

「「むちやくちやな…」」

「（…星、満お兄ちゃん、気をつけるのだ。さっきの時とはなんか  
雰囲気が違うのだ…）」

「（ああ…）」

「（わかっている…）」

「邪魔するってんなら仕方ねえ…全員まとめてかかって来いや！」

五対一が始まった

コワレた心々狂乱の宴々（前書き）

鬱注意です！

コワレた心く狂乱の宴く

『佳くくん!』

『あはは、大丈夫だよ。私はどこにもいかないから!』

…なんだ?この記憶は…

『私は…あなたが好き。世界で一番愛してる』

…そつだ。この声は俺の…

『ごめんね…もう…一緒にいれないみたい…』

『ずっと…側にいるから…』

俺の“咎”の記憶だ

『愛してるよ』

く side 玲く

「なんや?急に呼び戻して。あのまま行けば押し切れとつたで?」

霞が少し不機嫌そうに言う。…今までの鬱憤がやっと晴らせる機会  
だったんだし無理もないか

でも…これは言って置かなければいけない

「…佳史が捕縛された」

『なにイ！？』

「どついう事や！？オイ愛紗！椿姫！お前らは一体何をやってたんや！」

「私達は…」

「……佳史の指示で。両翼の援護をしてた」

「総大将ほっぽりだしたんか！何の為の護衛やねん！お前ら」  
「そこまで」……スマン。つい頭に血イ上ってもうた……」

「いや、いい」

「…佳史が捕縛されたのは事実。私達の責任だから…」

俺はそこで両手を叩いて、

「今は責任がどうかどうでもいい。肝心なのはどつやって佳史を取り戻すかだ」

一旦辺りを見回してから

「恐らく佳史は猿紹の天幕にいる。そして今なら奴らも油断していいるだろう。…そこを徹底的に叩く」

「でも少し卑怯ではないか？」

「あいつが一騎打ちの横槍で投網されて捕まったとしてもか？」

『！！』

全員（恋以外）が驚いた顔をする

「卑怯な手を使ってきたやつに卑怯な手で返して何が悪い？俺はどんな手を使ってでも佳史を救い出す。…賛成できなきゃそれでいい。ただし着いてくんな。俺は一人でも行くぞ」

「どうしてそこまで…」

函谷関で勝利した後、ついさっき合流したねねがそんな事を聞いてきた

「…この時代、太守と呼ばれる輩はどいつもこいつも屑ばかりだ。私腹を肥やし、圧制を敷き、保身ばかりに時間を費やす…少なくとも俺や優里が見て来た奴らはそんなのばかりだった」

優里が荒れたのもその所為だったな…

「……………」

「けど、あいつは違った。義勇軍のとはいえ長なのに、絶対に兵を駒として見ず、将を仲間と呼び、今では穰陽の民を家族と呼ぶ」

何よりこんな無愛想な俺さえ“親友”と呼んでくれた

「家族が助け合って何が悪い。支え合っるのが家族だろ」

「…そうやな！」

「主様を奪還しよう！玲、指示を頼むぞ」

「…負けない」

「…恋もいく」

なんだ。結局全員来るのか

「…これより夜襲をかける！攻撃こそ最大の防御だ！攻めて攻めて攻めきるぞ！」

『応…！』

side out

〈三人称視点〉

ガギイ、ドガツ、キイン

「くっつっ！」

「な、なんで五対一で押されるんだよ…」

「わかつただろ！お前らが喧嘩売ったのはこういつ奴らなんだよ！」



満と猪々子が言い争う

「よそ見たあ、余裕だなあ!!」

「ぐうつ…!」

弾き飛ばされ、距離ができる五人

先程から佳史の攻撃範囲に入れば防戦一方で、ロクに攻撃すらさせてもらえない

「なんだなんだよなんなんですかア!?その程度で俺を仕留めようなんざいゝい度胸だなあオイ!!」

「何をやっているんですの!?さっさとやつつけて下さいな!」

「(じゃああなたがやれよ)やればよかるう／やればいいのだ」

「」

もっともな心の声だ

「…にしてもどうすんだ星。このままだとジリ貧どころか、その内全滅だぞ」

「うむ…姜維殿はどうやら理性を失っておるようだが…そのせいで余計に感覚が鋭敏になっておるようだ」

「…勝ち目0って訳か」

「悔しいがな。今の姜維殿は恐らく容赦も情もない。そしてあの方

は…間違はなく現時点での武の頂点だ」

目の前で鈴々達三人がかかって行っているが、星と満は手が出せない。三人以上で一斉に攻めても邪魔になるからだ

「やれやれ、文官の俺の出番じゃねえだろ。コレ」

「まあ、いい経験だと思えばいいではないか」

「経験云々の前に人生終わりそうだがな…って危ない！」

満の声に二人共飛び退く

一瞬遅れて、黒天霸狼が満達がいた場所に突き刺さった

「あらら、外れた」

「くっ…」

「もう二人脱落したんだが…もうちょっとくらい楽しませてくれよオオ！」

「早くその化け物を止めなさい！早く！」

猿紹の金切り声が響く

「あ〜んし〜んしてるオ、てめえは最っ高に最っ低に醜く無惨に殺してやるからよオ！」

「ヒィ！…！」

「さうって！てめえらは一体何秒もつてくれんのかなあ！！」

「…あゝあ、つまんねえ」

目の前には血を流して倒れている五人の姿

辛うじて呼吸している事から死んではないようだ

「つまんねえつまんねえつまんねえつまんねえ！！どいつもこいつも雑魚しかいねーじゃねえかよ！！」

佳史の目はそこから猿紹に移る

猿紹は蛇に睨まれた蛙のように一歩も動けない

「…あはははは、そーいやお前の仕置きがまだだったなあ？」

「嫌あ…」

恐怖のあまり泣き出してしまふ猿紹

「なんだあ？泣けば許してもらえなくても思ってたかあ？甘エよ」

そう言つと佳史は薄く猿紹の腕を斬りつける

「嫌あああああ！！」

「あははは！！カスのわりには良い声で鳴くじゃねえか！！」

狂乱の宴は、尚続く

玲達は、未だ着かない…

コワれた心ぐ崩れたココロぐ

「…とりあえず、夜襲はウチ、愛紗、椿姫、恋だけで仕掛けるで」

「何故だ？」

準備をしようとするみんなが動き出す前に、突然霞がみんなを止めた

「説明してる時間が惜しいから単刀直入に言うけどな…今の佳史は敵味方関係なく容赦ないと思う」

霞の放った一言に、その場に戦慄がはしる

「…どういう事？」

「…どういう事も何も今言った通りや。事情が事情やから詳しくは言われへんけど、アイツはある条件下やと理性が壊れるんや」

(今で言うトラウマ)

「その条件とはなんだ？」

「…卑怯な手で、味方の誰かが捕まる」

『…』

「それって…」

「そつや。今回は偶々アイツ自身やったけど、間違いなく理性は無

くなつとる」

「どうにかして止められないのか!?!」

「今は気絶させるしかないねん」

「確かにそれなら一般兵をどれだけつき込んで無駄だな…」

「佳史は一对一より一对多の方が強いから」

「……………」

「玲殿?どうするのですか?」

「仕方ない、か…霞。お前に全権預ける。将を全員連れて行っても構わない。だから…」

「わかつとる。絶対全員で帰ってくるから安心しい」

「頼んだぞ」

「ちよいと遅かったか…?」

目の前には、劉備軍の将と猿紹の二枚看板が倒れて気絶していた

「これをすべて主様が…?」

「そつや。…腹括りや。調練の時の比やないで」

「「「(ゴクリ)」「」」

そこからまた暫く進む

すると…

「あゝあゝあゝあゝ!!もう氣イ失いやがった!つつまんねえなア、  
オイ!!」

よく知っている声、しかしその声で言われるはずの無い罵詈雑言が  
聞こえてきた

「っ!!ヤバい!急ぐで!」

「わかった!」

「…っん」

「…(コクコク)」

そう言つと、全力で声の方向に駆ける

そして、愛紗達が見た物は…

ぼろ布のよつに切り傷だらけの猿紹と





コワレた心々想い、届く時々（前書き）

今回のお話は

・霞大活躍

・ずっと愛紗のターン

・フラグ建設

の三本でお送りします

コワレた心、想い、届く時

side 愛紗

あらかじめ霞から主様が理性を失う“理由”は聞き出していた

しかし…

「あはははははー!!」

目の前にいる“コレ”は本当にあの人なのだろうか？

…私が、私達が敬愛する何者にも縛られず、無益な殺生を嫌う優しいあの方なのだろうか？

そう思わずにはいらなかった

「ん？おゝいおいおい、団体さんがなぐんの用ですかア!？」

そう言つて興味も失せたのか猿紹を投げ捨てる“何か”

…主様の姿、主様の声…しかしあれを主様とは、私が愛する殿方とは呼べない。呼びたくない

そんな事を考えていたのがまずかった

「オイオイ、人のツラみて固まるとか失礼だつてー…のっ!」

「!」

いつの間にか眼前まで迫られていた

避けきれない！

そう判断して、せめて致命傷だけは避けようとして頭に頭と心臓だけをかばって

ガギイン

「何しとんねん！腹括れ言つたやろ！」

目の前で霞が剣を受け止めていた

…私が固まるのは予測されていたのか

「…すまない。しかし…あれは本当に主様なのか？」

「あれは佳史であって佳史やない。あえて言うなら…佳史と対極の存在や」

「…対極？」

いつの間にか椿姫も側に来ている

今は恋が相手をしているので、参戦すればかえって邪魔になると判断したのだろう

「せや。いつもの佳史が優しい、無益な殺生嫌い、理性的、信念を通す性格やとしたらあれは無慈悲、殺人狂、本能のままに行動、快

楽主義や」

「…傍迷惑」

「まあ否定はせんけど…ってそろそろ恋と交代すんで！流石に限界や」

見ると、明らかに恋が押されている…と言つか防戦一方だった

対して奴は少々息が乱れているものの、まだまだ余裕そうだ

「恋！退きい！」

「…次は、私達」

「あらら、もうちょいでその女殺れたんだがなあ。まあいいや。次は姉ちゃんらが相手してくれんの？」

「…そうです」

「あっはっは！いいねいいね！興奮してきたぜ！簡単にくたばんじやねーぞオ！？」

…もはや私達の事すら忘れているのか

私達を姉ちゃんと呼び、まるで赤の他人のように振る舞うのを見て、胸が痛くなっただが、無理やり抑えて奴と対峙する

…構えるだけで心が折れそうになる

それ程禍々しく、気持ち悪い闘気だ

「……………はっ！！」

耐えられなくなったのか、椿姫が斬り込む

「はっ！そんな真っ直ぐな刃で俺が殺られるかよ！」

そう言っつて奴が構える

あの構えは…不味い！

「椿姫！駄目だ！」

椿姫も気づいて武器を引こつとすするが、すでに振り下ろしてしまっている

「椿姫！」

「…くっ…」

キーン！

「だから調練とは次元が違う言っただのに…ちょっとは落ち着かない！」

凶刃を防いだのは、またしても霞だった

「…「じめん」」

「ええつて…でも氣い付けや。そう何度も助けられへんで？」

「…うん」

…？なんだ…？何か主様の動きに違和感が…

「余所見するたあ…余裕だなあ！」

「！…！」

今度は青龍堰月刀で防ぐ

…？まただ。何だこの感じは…？

「愛紗！早よ動け！止まっとならええ的やぞ！」

「！ああ！」

今は主様を取り戻す事に集中しよう

そう切り替えて、私は青龍堰月刀を握り直した

「はあ…はあ…」

「くっ…」

「どんな体力しとんねん…」

「……………」

四人がかりで攻めても攻めきれない

「はあゝ…四人がかりでこんなもんか…もオいいや。飽きた」

奴は心底つまらなさそうに吐き捨てる

…でも、漸く違和感の正体は掴めた

私の考えが間違いないなら、主様は完全に奴に吞まれた訳ではないはず…

「じゃあさあ…もう面倒だし…さっさと死んでくれや」

そう言うと奴は霞目掛けて突進してくる

…霞は消耗し過ぎて避けられない。

なら、

「あ、愛紗！？何やってんねん！早よ逃げえ！！」

霞が叫ぶが今は無視する

剣は、私目掛けて振り落とされ



私の一寸横を通り過ぎた（・・・・・・・・・・）

「なっ!？」

「やっぱり……」

明らかに動揺する奴にゆっくりと近づいていく

奴はそれに合わせて後退するが、所詮は天幕の中。すぐに追い込まれる

「ずっとおかしいと思っていた」

「な、何がだ!」

「貴様が霞や恋、椿姫に斬りかかった時、いつもギリギリで避けられる所だった。私達は貴様の剣速を見切れないのにもかかわらずだ」

「……………」

「主様はまだ消えていない。眠っておられるだけだ」

「…違う！！アイツは俺が取り込んだハズだ！！」

「消えてない！！」

自分でも、思いもよらない位大きな声が出た

そして、気付けば私は、また、主様…いや、佳史様に抱きついていた

「お願いですから…戻って来て下さい…私は、私、は…」

そこまで言っつて、血を流し過ぎたのか、私の意識は途切れた

貴方様を、あの時からずっと、お慕いし続けています

だから、どうか私の愛した貴方のままでいて下さい

終戦〱“俺”と“オレ”〱（前書き）

す、スランプだ…

終戦く「俺」と「オレ」く

「……ここは…？」

目が覚めると、見知らぬ場所に立っていた

俺は一体…確か投網で捕まって、張飛にやられて…

駄目だ。そこから全く記憶がない

…とりあえずここにいっても仕方ないし、進んでみるか

「本当にどこだよ…」

あれから一刻ほど歩き続けているが、一向に出口も建物も見えてこない

…さて、どうしたもの！？

突然目の前に人が現れる

「…誰だ」

「オイオイ、いきなり『誰だ』とはご挨拶じゃねえか」

…暗闇で顔が見えないせいで、相手が誰かもわからない

しかし、そいつが近づいてくるにつれ、次第にその顔が明らかになった

その顔は

「……お、俺……!？」

「その通り！オレはお前でお前はオレだ！久しぶりだなあオイ、俺”よお!”」

「……久しぶり、だと？」

過去にこいつに会った覚えなんざ全くない。ましてやこんな場所に来た覚えも無い

「あらら〜忘れちまったのか？ヒツデエなあ！何年もオレが表に出ねえように封じ込んでやがった癖によお……!」

…封じた？俺が？

「そつだよ！お前が淡華をやった“あの日”からずつとなあ……!」

「……!？」

何故俺の心を!?!いや、それより…何故こいつが“あの事”を知っている!?!?

「言っただろうが！お前はオレでお前はオレはお前だ！お前が知っていてオレが知らねー事なんか存在しねーんだよ！！」

そう言いながら俺と全く同じ構えで斬りかかってくる

少し反応が遅れたが、即座に立て直し、弾き返す

「何を…」

「正直もう封じられんのはウンザリなんだよ。だからさあ…とつととオレに主導権を譲りやがれ！」

「ぐっ…！」

…さっきから封じたただの主導権だの表だの…俺の預かり知らない所で何が起きてんだ！

「…とりあえず、お前を倒せば落ち着くのか…？」

「おお？やんのか？甘ちゃんに成り下がった今のお前に俺が負ける訳がねえよ！！」

「やってみねえとわかんねえだろう、がっ！！」

ガギイン

「いいねえいいねえ！楽しくなって来たぜえ！」

…そこからはただの斬り合いだった

奴が袈裟斬りなら俺は逆袈裟、逆に俺が突きを出せば奴は回転して避け、そのまま払いを仕掛ける

…俺の戦い方そのものをもって仕掛けてくる

お互い手の内はわかっているからか、とても戦いやすい

…が、それと同じくらい戦いにくい

力も技も、速さでさえ全く同じ

決定打が入らないのと同じくらい入れられない

…集中力が切れた方が負ける…わかっているけど、どうしても切れかかってしまう…

「オラ！どうしたどうしたア！技のキレが甘くなってんぞ！」

「お互い様だ！」

そして何度目かわからないがまた距離をとると、“オレ”は突然武器を下ろした

「……………？」

「…なあ、俺よオ」

「なんだ」

「いつまで自分を責め続けるつもりだ？」



「……………」

「もオいいじゃねえか！もう十分傷ついた！もう十分償った！…そろそろ自分を許してやってもいいだろ？」

「……………」

俺は答えなかった。いや、答えられなかった

何度も口を開こうとしたが、何かに妨げられているように声が出ない

「…オレはお前なんだ。お前が苦しいとオレだって苦しいんだよ…！もう淡華だって許してくれるだろう！？いい加減過去じゃなく未来に目を向ける！あの頃みたいに一人じゃねえ！愛紗も！椿姫も！霞も玲も優里も陥奈も呉の奴らもいんだろうが！」

今までの威圧的な口調が嘘のように、オレの声は弱々しかった

「…違うな」

「何が！」

「淡華なら別に償いなんてやらなくても許してくれるだろうさ」

「だったら尚更」

「これは俺の業だ。あの時、俺がつまんねえ意地はった所為でアイツは逝った…」

…アイツも天水の奴らも気にするなどは言ってくれたけど、それで

も俺は自分が許せない。許さない。今俺が演じるのは俺が生きる理由だから」

「……………」

「だから…俺が俺になるのはもう少し待ってくれ。…いつか自分を許せる時まで」

オレは目をつむって考えている

そして…

「…わかったよ」

返って来たのは了承の返事

「ただし、これからは少しは自分の事も考えてくれ。俺じゃなく、オレのためでいいから…」

「…善処するよ」

「守る気ねえだろお前」

そんな掛け合いをして笑い合う

少し前まで本気で斬り合っていたのが嘘のように

そして、だんだんと目の前が眩しくなる

そして、目の前が真っ白になる直前、

「忘れんなよ。お前がお前をぞんざいに扱っんならすぐにオレが出るぞ。」

…後、ちょっとはアイツらの気持ちに伝えてやれよ」

…アイツら？気持ち？何の事だ？

そんな事を考えながら俺の意識は遠のいていった

終戦〜目覚めた後に〜（前書き）

あとがきに重大報告が…

終戦、目覚めた後に、

「…ん…」

「！佳史！」

「…玲、か…？」

俺が目を覚ますと、見慣れた穰陽の城で、すぐ玲に声をかけられた

…穰陽？

「玲！戦は！？月は！？」

「落ち着け。…一言で言うなら、戦は負けだ」

「……………」

やはり、か

それから玲は順に戦の内容を説明し始めた

まず、俺が暴走した事により、うちの将が満身創痕になった事

愛紗が止めた俺も今の今まで意識を失っていたため、策を巡らせる  
しか戦の方法がなかった事

その隙を突いて、虎牢関の戦いにいなかった曹操が洛陽を強襲した事

「洛陽自体は月が民を逃がしていたから特に城壁以外に被害は無し。華雄は捕縛されて登用された。月と詠は華音が劉備に言って保護されたらしい。恋とねねは行方不明だが…あいつらなら心配ないだろ」

「そうか…」

事実上の董卓軍の壊滅

「…暫く荒れるな」

「そうだな。後、他の奴らに顔見せてやれ。特に愛紗と椿姫は尋常じゃないくらい動揺してたからな」

「ああ…」

…そろそろあいつらに俺の過去を話すか

あんな事があったことだしな…

終戦〜目覚めた後に〜（後書き）

佳「で？作者。重大報告ってのは？」

「うん。受験が迫ってるからね〜…多分更新が暫く出来なくなる可能性が…

出来たとしても今までよりかなり遅れるかも…」

佳「今ですら遅いのにな」

グサツ

佳「と、言うわけで暫く更新が無いかもしれませんが、この小説をよろしく願います」

華「まったね〜」

佳「…いたのかお前」

華「失礼な!!」



追憶〜出逢い〜（前書き）

「集まったか…」

「どうしたのですか主様？何か急用でも…」

「…戦？」

「いや、先の戦であんな事になったからな…お前らに俺の過去を話しておこうかな」

「…ええんか？あの話になったらどうしてもアイツの事を…」

「…大丈夫だ。いい加減腹くらねえといけねえから…」

「…そうか」

「…長くなるが聞いて欲しい。さて、どこから話すかな…」

追憶く逢いく

知ってるか？剣閣の近くに化け物がいるらしいぜ？

何でも劉焉様の軍5000を一人で壊滅させたとか

しかも子供の姿で人を騙すそうだ

「はよ来いや淡華」

「待ってよ霞ちゃん……」

二人の若い少女が道を走っている

その様子は微笑ましいもので、周りの大人達は二人を温かく見守って……

「にしかもここどこや？カンペキに元の道見失ってもうたな……」

「あう……ごめんね霞ちゃん……」

いなかった。

実はこの二人…正確には淡華と呼ばれている少女が道に迷ってしまったのだ

「別にええよ。迷ったんやったら元の道に戻れば」

ガサツ

「…お？珍しく人の声が聞こえたから探してみりゃあ…今日はツいてるな。まさかこんな上玉二人も見つけるなんてよお」

「ヒヒヒ…全くでさあ！」

「ひっ!？」

草むらから体躯の大きな男と小さい男が出てきた

そして淡華が捕まったらどうなるかを直感で感じ取ったのか、怯えて動けなくなつた

「なんやアンタら…何か用か…？」

「おうおう、そんな警戒すんなよ嬢ちゃん。おじさんたちは嬢ちゃん達みたいな迷子を保護して新しい親に合わせてあげるそれはそれは優しいおじさんなんだよ」

「まあ、それまでに大人の階段を昇っちゃうかもしれないけどね」

「「ギャハハハハハ!！」」

とどのつまり、ただの人買いである

しかも男達はその中でも最低の類のようだ

「さあ、こつちに来てもらおうか？」

「ちょ、離せや！」

「痛い！」

( ( 誰か…助けて!! ) )

ザシユ

「くくく…くくく…へ?」「くくく」

突然少女達を引っ張っていた小さい男の両腕が地に落ちた

「ぎゃああああ! ? 腕が! 腕がああ! ?」

「な、何だ! ? 誰かいるのか! ?」

ザシユ

「…つるさい」

声と同時に小さい男が崩れ落ち、動かなくなった

そしてその後ろには、ボロボロの服によごれた体の少年が立っていた

「…ひい！？ま、まさか…噂の鬼か！？」

少年は否定も肯定もせずにその場にただ立っている

しかしそれが余計に男の恐怖を煽った

「た、頼む！金ならここに置いていくから！い、命だけは！…そ、  
そうだ、なんならこの娘共を…」

「…だから、うるさい」

そして男はその後二度と口を開く事はなかった

「……………」

少年は何事もなかったかのように立ち尽くしている

普通ならば、この少年〜10歳くらい〜のような年齢ならば、親に  
甘えて、守られて、安心して暮らしているはずだ

…しかし

「…ねえ」

「…？」

「どつしてそんなに悲しそうなの？」

少年にはそんな様子は微塵もない

少年の目には諦観、悲壮、苦痛…そんなものが映っていて、もっと言うなら感情がなかった

「…別に」

「…あ、そつだ！助けてくれてありがとう！」

「……………」

少年は淡華の言葉を無視して森に入っていこうとするが、案の定淡華に手を掴まれて行けなかった

「……………何？」

「助けてもらったらお礼をなさいって言われてるの！だからウチに来て！」

「…いらない」

「さあ、行こー！！」

聞いてない。

「諦め。こうなった淡…鐘会は何言つても聞かんわ。…まあ、悪い事にはならんはずやから心配せんでええよ？」

「……………」

そして少年は大した抵抗も見せずに引きずられていった…

追憶（『真名』）（前書き）

息抜き投稿！

追憶『真名』

「ここが私の家だよ！」

「やっと着いたな……」

「……………」

かなりの時間をかけて（淡華の天然が発動したため）ようやく二人が住む村に帰ってきた

…ちなみに少年は道中ずっと引きずられていたのだが、全くの無表情を貫いていた

「とりあえず早く中に……」「淡華……！」

淡華が中に入ろうと言う前に二人の男女が慌てた様子で駆けってくる

「お父さん！お母さん！」

そしてそれに気付いた淡華が急いで二人の元に

「……こんの天然娘エエエ……！」

「へぶうっ!?!」

行けなかった

淡華が両親に飛びつこうとしたら、見事にシンクロした投げ技で家



の中に放り込まれた

「お前は何回迷子になれば気がすむんだ！」

「さあ？」

淡華と両親の口論の間

「…帰っていい？」

「頼むから置いていかんといて…」

こんなやりとりが十数回あったとか…

「で？つまりは道に迷った 山賊に襲われた この男の子が出てきて助けてもらった そうだ、お礼をしよう お持ち帰りだぜイエー イって訳か」

「うん、そー」

「まあ、ありがとうね、君。おかげで淡華が無事に帰ってこれたわ」

「……そう」

鐘一家と少年で全員マイペースなやりとりをする

ついでに言つと霞は「付き合ってられんわ…」と言つて少年に礼を

言ってから帰っていった

「そつだ、君。名前は何て言うんだい？」

「…名前？」

コテンと首を傾げる

余談だがその可愛らしい仕草に女性陣はノックアウトされていた

「うん。俺はホウ縁。字は伯維。で、このおば（ニコッ）…お姉さんは鐘優。字は里約。こっちの子は鐘会。」

ホウ縁は丁寧に紹介し、少年の反応を待つ

少年は少し考えた後

「…鬼子」

そつ言った

「鬼子？」

「…みんなそつ言う。みんなが呼ぶのが名前」

「親から名前は貰わなかったのかい？」

「…親？」

ホウ縁はここでやっと気付いた

少年は親を知らない

つまり、親がない

捨てられたか、賊が親だけを殺して行ったか、生まれてすぐに親だけ逝ったか…

言葉が少しカタコトなのもその影響だろう

しかも、この少年は一人で大の大人二人を殺した（・・・）

普通に暮らしていれば、まだまだ親に甘えたい年頃の少年が、だ

「君…」

どれだけ辛かっただろう

「君の名は、姜維」

どれだけ寂しかっただろう

「真名は佳史」

たった一人で、森に放り出されて

生きるために、心を殺して

どれだけ、辛かったことだろう

…だから、俺達は癒やしをやるっ

鬼子と呼ばれ、避けられたこの子に、安らぎを与えよう

「今日から俺達が、君の親だ」

今まで辛い道を歩いて来たこの子に、せめてもの優しさを

「一緒に暮らそう」

これからのこの子が、佳き歴史を歩めるように…

「と、そういう訳で俺は鐘家に引き取られたんだ…ってどうしたお前ら」

佳史が周りを見渡すと、玲と霞、華音以外のその場に居る全員が泣いていた

「良い話ですう…グスッ」 愛紗

「…感動した。佳史、苦労してる」 椿姫

「まさか佳史様にそんな過去が…」 陷奈

「ふにゅーっ」(号泣) 優里

…アニメ版を見た方はチビキャラVerを想像して下さい

「ニヤン」？

『…ってニヤン！？誰だ今ふざけたのは！？』

せつかくのいい雰囲気の水を差されて、ついつい全員ツッコミをしてしまう

…霞の悪影響である

「ああ、鈴りんか（やな）」

『鈴？』

全員が頭に疑問符を浮かべた所で、佳史の頭の上に何かが飛びのる

「おう、鈴。また連絡か？」

「ニヤーン」

『…ってマジで猫お！？』

そう、佳史の頭の上には若干小柄の猫がいた

「主様の飼い猫ですか？」

「いや？伝令役」

「ニヤー！」

『ええっ!?!?』

「どつでもいいけど仲良いなお前ら」

全く気にせず鈴からくわえていた手紙を受け取る

「コイツはな、呂範。で、真名…というか愛称が鈴や。ちなみに今んとこ佳史にしかなくついとらん…メツチャ可愛いのに」

霞の言葉に手をワキワキさせていた女性陣が肩をがっくりと落とした

その騒ぎをどこ吹く風と手紙を読んでいた佳史が突然立ち上がった

「…呉に行くぞ」

すごい嫌そうにそう言った

「…ああ、あの姫さんか？」

「冥琳と穩が限界だから至急来てくれ、ってよ。後なんか預かってほしい奴がいるとか」

「預かってほしい奴？」

「優秀なのは優秀なんだが、呉だと武一辺倒に育ちそうで怖い。主に雪蓮の影響が来そうで…だそうだ」

「ふん…」

そんなこんなで、昔話を中断して県に行くことになったのだった

虎の国く史上最強のお猫様く

く漢津港く

「主様、孫策殿と面識があったので？」

「面識つつーか…美れ…孫堅とちよつとあつてな。ほぼ同盟関係だ」

「あの江東の虎と！？しかし孫堅殿は劉表との戦で戦死されたのでは…」

「あ…それなあ…」

何故か少々言いにくそうに頭を掻く佳史

「まあ向こうについたらわかんたろ。説明面倒だし」

「「オイ」」

優里と愛紗がきっちりツッコむ

もはや霞の芸人気質が広まりつつある

ちなみに今港にいるのは佳史、愛紗、優里、鈴の三人と一匹である  
他の面子は劉表が軍備を整えだしたという情報から穰陽の守備に  
ついている

「まあ、いいです。それで『ほぼ』同盟関係と言つのは？」



「それは私が言います。愛紗さんも今南陽群は誰が治めているか知っていますよね？」

「確か猿術だろう？あまり善政は敷いていないようだが」

「そうですね。まあそれは今は置いて置きます。南陽群、つまりは江東の拠点を猿術が支配している状態です。また、朝廷の命で孫堅殿が表舞台から消えた後に孫策殿は猿術の麾下にされています」

この時代、儒教思想が主流なので、義、仁、忠などが尊ばれる

早い話、上の命令は絶対なのだ

「結果として孫策殿は今は猿術軍に所属している事になっています  
です」

「なるほど。それでほぼ同盟関係というわけか」

「まあ奴らは孫呉復興させる気全開だけだな」

血の気が多い奴ばっかだから、と付け加えて川の方を向く佳史

そこには呉が誇る優美な巨大艦船が迫っていた

「久しいな、思春、明命」

「御壮健そうで何よりです」

「お久しぶりです!!」

無愛想に返事を返す禪団子…思春と元気よく返事する黒髪チビっ子  
…明命

「あの…それで…お師匠様は…」

「鈴か?多分俺の船室で寝て」「鈴が師匠!?!」「るってうるせえなバーロー」

「いやいやいやいや、流石に猫が師匠って…ええええええ!?!」

「本当だつての。アイツ華音が育ってからサボってるけど元々隠密頭だぞ?」

…俺も始めは耳が腐ったか頭狂ったかと思っただけ

「…いくら客人といえど、我が師を愚弄するなら容赦はせんぞ」

「お師匠様は凄いですよ!」

鈴の言葉(というか身振り)を理解できる奴が少ないって事を除けばあれは最高の隠密だからな…何せ猫だし。警戒なんかされないし

「ニヤァ…」

「お。起きたk「お師匠様〜!!」「…」

鈴を見つけた瞬間、明命が半端じゃない速さで鈴を拉致…もとい愛で行った

「…思春」

「無理です。あいつは街の猫でさえ『お猫様』と呼ぶほどの猫好きですから」

「…そうか」

「はう〜…至福です！至高です！楽園ですう〜!!」

「にゃあぁあぁあぁあぁあぁ…」

…頑張れ、鈴

—————

「ここで少々お待ち下さい」

俺達三人は思春の案内で建業の城に来ていた（結局明命と鈴は戻って来なかった）

「孫策殿はどのような方なのですか？」

「ん〜自由奔放、天真爛漫、戦狂い、脱走癖のワガママ姫さん」

「あとは軍師泣かせ、と言っておきます」

「…なんか主様と大差ないような…」

失礼な。俺程真面目に生を全うしている奴はいないのに

「どの口がそれを言いますか…」

「心を読むな優里」

「言葉に出ています」

「アレ？」

「あゝ…他にはどんな方が？」

愛紗が空気を読んで話題を変えた

「まず周瑜。孫策の目付役兼筆頭軍師だな。本人も戦えるけど…優里と一緒に「ちよっ!?!?」「」

「優里お前戦えたのか？」

「アハハ、ナニヲイッテラッシャルノデ？」

「何故にカタコト？」

「色々墓穴掘ってんぞ？」

「ぐぐっ…!」

まあ優里は元（『あゝ！あゝ！聞かせない！』）だからな

「まあ、孫策は周瑜が抑えてくれるからそんなに厄介じゃないが…」

「…孫策殿（主様）以上に厄介な方が…？」

何か変な副音が聞こえたような…

それと愛紗。何でそんな『有り得ない』と言わんばかりに顔が引きつってんだ？

「ああ。じつは孫策の…」佳史（『（ヒュオン）

俺が次の言葉を口にしようとした時、音速並みの速さで拉致られた

…アレ？なんかおかしくね？

虎の国く蓮華大乱く

く玉座く

「雪蓮様、黒狼衆の方々をお連れしました」

「ありがとうございます…久しぶりね、優里く！元気？」

「はい。…そちらはあまり芳しく無さそうですが」

「あ、あははく…わかつちやった？」

「ええ、貴女のその顔を見れば…」

「諦める雪蓮。優里の言う通りだ」

「あはは…ってそっちの娘は？新しく入った娘？」

「関雲長と申します」

「へえく…って黒髪の子山賊狩り！？佳史もまた…」

「…連れてくる人が全員優秀すぎて何も言えないんですよ…」

「…お前も苦労しているな」

「わかつてくれますか…」

優里と冥琳に何かの友情が芽生えた！！

「それで…呼ばれた訳はやっぱり…」

「ええ…蓮華よ…」

「離せ」

「ヤ」

一言できっぱり拒否される

物凄い簡単に現在の状況を説明しよう！

王の間に向かう 拉致られる 抵抗虚しく部屋に引きずり込まれる  
抱き枕に

何を言ってるかわからないって？当たり前だ。俺もよくわかってないからな

「うみゅ〜…」

「いや、本当にお前誰だよ。キャラ崩壊も程があるだろ！」

「貴方もです」

「うるさい思春！っ！かお前も止めるや！明らかに御乱心だろっが  
！」

「蓮華様が幸せそうなので、無理です」

「チクシヨ！味方がいねえ！」

わかってたが、俺はこのために呼ばれたんじゃない！…と信じたか  
った…！



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3814s/>

---

新・恋姫†無双～黒狼伝～

2011年11月20日20時59分発行